

(別表第1)

## サービス評価結果表

### サービス評価項目

(評価項目の構成)

#### I. その人らしい暮らしを支える

(1) ケアマネジメント

(2) 日々の支援

(3) 生活環境づくり

(4) 健康を維持するための支援

#### II. 家族との支え合い

#### III. 地域との支え合い

#### IV. より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!  
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!  
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 10 月 12 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 25名	(依頼数) 27名
地域アンケート回答数	3名	

※事業所記入

事業所番号	3870103417
事業所名 (ユニット名)	パートナーハウスこすもす Aユニット
記入者(管理者) 氏名	小濱 成美
自己評価作成日	令和 4 年 9 月 9 日

(別表第1の2)

【事業所理念】 「幸せの追求」「あるがまま」を笑顔で支える。家族と共に・・・仲間と共に・・・地域と共に・・・	【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 ○口腔ケアは前回に口腔ケアは毎食後にしているが、舌の状態など細かいところまでチェックができていなかったが目標計画として取り上げた。話し合いの結果月に1度は(8日)を口腔ケアの日と決め舌の状態まで確認するようにした。 ○月の行事として記入はあるものの個人の介護記録に細かい結果は記入ができていない部分があった。また地域とのかかわりが少なくなっているのだからかかわっていききたいとしているが、やはりコロナ感染の為関わりができていない。その中でも小野久米地域包括が中心となって「ちよいそこ」という地域の行動手段になる送迎サービスの停留所にもなっているのでも多少なりとも関わりができていていると思っている。	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 開設して20年目を迎える事業所は、松山市郊外の閑静な住宅街にあり、周囲にはのどかな田園風景が広がっている。職員は、利用者が家族や地域に支えられながら、笑顔で過ごせることを目指して、日々の支援に取り組んでおり、事業所で実施する避難訓練には、多数の地域住民の協力を得て、合同訓練を実施することもできていた。コロナ禍において、様々な制限が設けられ、家族や地域との接点が減少しているものの、こすもす便りや運営推進会議などを通して、利用者の暮らしの様子や事業所の取組みを発信しながら、継続的な事業所への理解促進が図られるよう努めている。また、職員は利用者に関心感なく、日々の暮らしを楽しみにしながら、自由にしたいことができるような支援に努めている。敷地内にある菜園では、季節の野菜栽培を行い、水やりや草引きなどの作業を通して、利用者の心身機能の維持向上に取り組むとともに、収穫した野菜を調理して季節感を味わっている。また、近隣にある川の土手には、桜並木のほか、彼岸花の群生があり、季節を身近に感じながら、戸外の散歩を楽しんでいる。さらに、事業所で一緒に暮らしているセラピー犬の「まる」は、利用者の癒しの存在となっており、犬の散歩は地域住民との交流の場にも繋がっている。加えて、管理者は、「利用者が楽しく暮らしている場所として、地域に根づいてほしい」と考えており、利用者や職員の穏やかな笑顔が印象的であった。
---	--	--

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくできている ○ほぼできている △時々できている ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
<b>I. その人らしい暮らしを支える</b>									
<b>(1) ケアマネジメント</b>									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	日々の会話を通して思いや意向をくみ取り家族様にも確認している	○	/	○	利用者自身の意思や納得のうえで、入居に繋がるケースは少なく、家族の意向で、入居となることが多い。また、日々の暮らしの中で、職員は利用者や向き合いながら、新しい環境に馴染み、穏やかに暮らしていけるように、一人ひとりの思いや希望を聞き取るようにしている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	本人の表情をよく観察し職員間で話し合ったり、家族様に相談している	/	/	/	
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	家族様と話し合っている。電話で本人と話してもらい確認している。	/	/	/	
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	◎	気づきがあればミーティングで報告したり介護記録や申し送りノートに書いている。	/	/	/	
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	◎	日頃の会話の中から本人の思いを知りなるべく希望に添えるよう心掛けている。	/	/	/	
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	入居時に今までの生活歴を詳しく聞いて情報を得ている。家族様に確認したり会話の中で把握する。	/	/	○	入居前に、ホーム長等が自宅を訪問して、利用者や家族と面会したり、暮らしの様子を確認したりすることができていたものの、コロナ禍において、現在は自宅等への訪問を自粛している。入院中の利用者の面会も制限され、書面での情報提供は医療の経過のみの記載に留まっており、利用者の暮らしの様子が見えにくく、把握できない場合が多い。また、今までに関わってきた介護支援専門員や、関係機関の担当者などからサービス利用の経過等の情報を得ているものの、暮らしの詳細な情報までは、得られにくい状況となっている。さらに、入居後の関わりの中で、職員は少しずつ、利用者から新たな情報を聞くようにしている。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	◎	普段の生活の中で様子観察し職員間で情報を交換しながら状態を把握するようにしている。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に努めている。(生活環境・職員のかかわり等)	○	一人一人の介護記録や毎日の申し送りや流れや変化は、把握できている。	/	/	/	
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	毎月のミーティングで一人一人について話し合うことで本人の思いを検討している。	/	/	◎	担当職員を中心に、センター方式のアセスメント用紙を活用して、似顔絵や写真を貼り、ADL状況等を項目別に整理された情報が記載されている。また、日々の暮らしの中で、新たに得た情報は、アセスメント用紙に赤字で追記して、職員間で共有するとともに、毎月のミーティングの中でも、利用者一人ひとりの支援方法を、全ての職員で検討をしている。
		b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	◎	職員の気づきを話し合うことで課題が見つかりその対策法を考えている。	/	/	/	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	ミーティングで介護計画を見直しながら本人の思いに添えるようにしている。	/	/	/	◎ 事前に、利用者や家族から意見や意向を聞くとともに、担当職員を中心に得られたアセスメント情報をもとに、計画作成担当者や管理者で話し合い、利用者や家族の意向を尊重した介護計画の原案を作成している。原案の計画をもとに、ミーティングを活用して、全ての職員で話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	◎	家族様の面会時などで現状報告を行い話し合っている。家族様と本人の思いが合うこともありその都度話し合うよう心掛けている。	○	/	/	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	家族様からの情報を得て支援方法を話し合っている。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	○	家族様によって協力などに差がある。消防訓練などで地域の方々に協力を得ている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	◎	毎月のミーティングで介護計画に沿って話し合いを行っている。	/	/	◎	職員は、ミーティングの中で話し合われた介護計画の内容の把握に努めるとともに、短期目標のサービス内容が、援助計画チェック表に転記され、職員は確認して、共有を行いやすくなっている。また、計画に沿ったケアの実践状況は、援助計画チェック表を活用して、項目ごとにチェックを行うとともに、介護記録等に内容を記載して、日々の記録時や毎月のミーティング時に、職員間で確認をしている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	◎	毎日支援できたが、できなかった場合はどうしてなのかを記録に残している。	/	/	○	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	半年ごとに見直しをしている。入院退院があればその都度見直ししている。	/	/	◎	介護計画は、6か月に1回見直しをしている。新たな要望や変化がない場合にも、毎月実施するミーティングの中で、利用者一人ひとりの現状確認を行い、介護計画の見直しを含めた検討をしている。また、利用者の心身状況に変化が生じた場合には、その都度必要に応じて、関係者で話し合い、現状に即した新たな介護計画を作成している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	○	月1回のミーティングで個人個人の現状確認を行い話し合っている。	/	/	◎	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	入院、また状態に変化がある場合は新たに計画を立て直している。	/	/	◎	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	定期的に月1回行っている。緊急の場合はその都度話し合っている。	/	/	◎	月1回、全体ミーティングとユニットミーティングを実施して、利用者の現状確認や情報共有、職員間での話し合いをしている。また、緊急案件がある場合には、その都度話し合いの機会を持っている。会議には、全ての職員参加を原則とともに、職員が参加しやすいように、早めに日程や時間帯を調整して、周知をしている。さらに、参加できなかった職員は、ミーティング記録を確認してもらい、内容を共有している。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	◎	リーダーを中心として全員が司会や書記を担当し意見の出しやすい会議にしている。	/	/	/	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	◎	前もってなるべく全員が参加できる月日を早めに決めていく。参加できない職員は記録を読みサインをする様にしている。	/	/	◎	
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	◎	利用者の情報は介護日誌に家族とにやりとり、業務連絡は連絡ノートにきゅし伝えていく。	○	/	◎	日々、朝の申し送り等が口頭で行われている。また、申し送りノートには、業務連絡を含めて、利用者の情報や医療情報がまとめて記載され、職員への伝達に使用されている。また、出勤時等に、内容を確認した職員は、その都度サインする仕組みが整備され、情報共有が図られている。
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	なるべく叶えるようにしている。	/	/	/	飲み物や着る洋服の選択など、職員は利用者から選べるよう工夫した声かけを行いながら、自己決定ができるよう支援している。レクリエーションなどの際にも、一人ひとりがしたいことをできるように、手の届く場所に道具を置いている。訪問調査日にも、新聞やちらしを見たり、ジグソーパズルや積み木をしたりするなど、利用者が思い思いの時間を過ごしている様子を確認することができた。コロナ禍において、地域の秋祭りも中止となったものの、手作りの神輿を玄関に飾り、祭り気分を味わえるよう工夫したり、菜園での活動や戸外の散歩の機会づくりをしたりするなど、外気に触れながら、季節を感じるができるよう取り組んでいる。コロナ禍以前は、いちご狩りやブドウ狩りに出かけ、目を輝かせた利用者の笑顔の写真を見ることができた。また、大学の実習生が来た際には、利用者や孫のような年齢の学生に喜び、普段はしないような話を披露するなど、活き活きとした様子も見られる。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくらせている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	飲み物は何が飲みたいか入浴時や起床時の衣服など希望を聞いている。	/	/	◎	
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	食事や入浴名地は希望に添えない時もあるが起床や就寝は本人のペースを大事にしている。	/	/	/	
		d	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	季節の花や壁画など季節を感じる雰囲気づくりをしている。	/	/	◎	
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らしができるよう支援している。	○	表情や反応を見ながら本人のペースで生活できるよう支援している。	/	/	/	
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	○	職員によってはその時の言葉かけが不適切な時は注意している。ミーティング時にも気を付けるように話す。声掛けはさりげなく話をするときは目線を合わせている。	○	○	○	職員は、人権や尊厳などを内部研修で学ぶほか、頻回にミーティングのテーマに取り上げて話し合い、ホーム長は指導や注意喚起をしている。「ちょっと待って、あとで」などの言葉を発する場面が見られるものの、その後に、職員は利用者により理由や具体的な時間を伝えるよう心がけて、対応をしている。また、居室の出入り際には、必ずノックや声をかけてから入室するほか、不在の際にも、事前に職員は利用者へ声をかけて、了承の上で入室するとともに、一緒に入室するなどの対応をすることもある。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	◎	必ずカーテンをや戸を開めるようにしたり入浴時にはタオルをかけるようにしている。	/	/	/	
		c	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	ノックをして声掛けしてから入室するようにしている。	/	/	◎	
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	個人情報は職員室で保管され漏洩防止についてもミーティングで話し、理解している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	食器拭きエプロン量などお手伝いしていただいたときは「ありがとうございました。」と感謝の声をかけている。	/	/	/	職員は、草引きや洗濯物たたみなどを利用者を手伝ってもらった場合には、「ありがとうございました」などの感謝の言葉を伝えている。また、利用者同士が励まし合ったり、仕分けた洗濯物を運ぶのを手伝ったりすることもある。中には、間違っても他の利用者の居室に入室したり、窓の開閉などの些細な行き違いで言い合いになったりするものの、利用者同士が不快な気持ちにならないように、早期に職員が間に入って対応をしている。さらに、席替えの際にも、当事者のみに留まらず、全ての利用者が納得できるよう工夫するなどの対応が行われている。加えて、仲の良い利用者同士で過ごせるような時間も、職員は大切に支援に努めている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	◎	入居者同士、会話や笑顔で励ましあったりして暮らせるように座席の配置を考えている。	/	/	/	
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)	◎	トラブルが起こらないよう座席を考え、職員が間に入り入居者同士不快にならないよう関わりあえる対応をしている。	/	/	/	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	◎	トラブルが起こった時にはお互いの話を聴いて不安を取り除き、トラブルが起きない環境を作る。	/	/	/	
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	△	入居前の調査や家族や知人の面会時に聞いたりしているがコロナが広まってからは詳しく把握できていないことがある。	/	/	/	
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていったりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	△	中々一緒に出かけられないが電話やリモートなどで関係はつながっている。	/	/	/	
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	○	現在コロナ感染の為外出事は控えている。しかし庭に出て鼻や野菜を観たり近くの土手へ1対1で散歩に行ったりしている。	△	x	○	コロナ禍において、外出制限が設けられ、以前のような外出支援はできなくなったものの、職員は可能な範囲で、利用者が外出できるよう努めている。天気の良い日には、敷地内で日光浴や菜園の世話をしたり、近隣を散歩したり、土手の桜や彼岸花、周辺の田園風景を見に行きなど、職員は利用者に季節を感じてもらえるような支援にも取り組んでいる。また、車いすを使用している利用者も一緒に出かけて、気分転換が図れるよう支援している。さらに、コロナ禍の感染状況を見計らいながら、感染対策を講じた上で、今後、ユニットごとにドライブに出かけて、コスモスなどの見学に行くことを予定している。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	x	外出事は職員で対応している。	/	/	/	
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	身体的、精神的に変化がある場合は話し合いを行って、なるべく取り除けるよう支援に努めている。	/	/	/	利用者自身に、できることやできそうなことをしてもらえるように、職員は声かけや見守りしながら、待つ支援を心がけている。また、洗濯物たたみや仕分け、片づけなどの手伝いをしてもらった場合には感謝の言葉を伝えたり、ノートに書いてもらった文字を褒めたりするなど、職員は、利用者が意欲的にやりがいを持ちながら継続できるような声かけなどの工夫を行い、心身機能が維持できるように取り組んでいる。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	◎	なるべくトイレにて排泄できるように声掛けや誘導したりむせのある方の食事を刻みやミキサー食にしたりとろみをつけている。また、ゼリーなどつくり少しでも水分を地追ってもらえるように努めている。	/	/	/	
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	出来る事は声掛けや見守りを行っている。しかし入居者がしてほしいと訴えられるときもあるのでやる気の出るような声掛けを行っている。	◎	/	◎	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	◎	出来る事、したい事は本人の希望も伺いながら支援している。	/	/	/	塗り絵やお盆拭き、洗濯物たたみ、菜園の草引きなど、利用者一人ひとりが、それぞれの得意なことやできることを継続しながら、職員は役割を担ってもらうとともに、楽しみとなるような支援に努めている。また、事業所ではセラピー犬の「まる」が一緒に生活を送っており、ユニットを巡回して利用者とは触れ合い、膝の上で可愛がるなど、癒しの提供とともに、利用者の共通の話題となっている。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごすように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	周りから見てできていなくても本人はそれで満足と思っているならばそれでいいという考えで対応している。	○	○	○	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つとらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	○	本人の気に入っているシャンプーや化粧品を使用してもらっている。髪型や洋服も好みを聴いている。				職員は、利用者の自尊心や自立心を尊重して、髭剃りや更衣などのできることをしてもらうことはできているものの、ちぐはぐな装いや乱れなどが見られる場合には、さりげなく声をかけて、服を着替えてもらうなどの対応をしている。訪問調査日には、整容の乱れや違和感のある装いの利用者の姿は見られなかった。また、重度の利用者は、着脱をしやすいような洋服となりがちとなっているものの、職員が色合いなどの本人の好みを考慮した服装を選んでいる。	
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	○	起床時に着たい服を選んでもらい散髪の際は長さを聞いて希望の髪型にしている。					
		c	自己決定がにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	本人の好みなどで希望に添えるように支援している					
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しむよう支援している。	○	どの服が着たいかなど話し合い本人の好みに合うよう支援している。また、季節にあった服を着てもらっている。					
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできなくてさげすみがかかっている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	着衣の乱れや汚れはないか確認している。着替える時は居室に戻っている。	○	○	○		
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	×	訪問理美容を利用している。髪型は好みを聞いてもらっている。					
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	なるべく色の組み合わせなど考えているがどうしても着替えをしやすい服を選びがちになってしまう。			○		
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	一人一人の状態に合わせた食事形態や嚥下訓練(健口体操)を実施している。				外部業者の管理栄養士が、栄養バランスの取れた献立を作成するとともに、業者から食材も配達され、各ユニットのキッチンでレシピに沿って職員が調理をしている。コロナ禍以前は、利用者に調理の下ごしらえや配膳などを手伝ってもらっていただくことができていたものの、現在は、感染対策で、職員が手袋を付けて調理を行い、利用者はお盆を拭いてもらうなどの対応に留まっている。月1回、季節の行事食を計画され、その際には食材の配達を止めて、利用者の希望を取り入れた献立を立て、職員が食材の買い出しに出かけて調理した食事を提供している。利用者の誕生日には、職員がケーキを手作りして提供するとともに、行事食の際には、たこ焼きづくりなどを利用者と一緒に作り、大変喜ばれている。茶碗や湯飲み、箸等は、自宅から使い慣れた物を持参してもらったり、利用者専用の物を使用している。破損した場合は、家族に用意してもらったり、利用者と一緒に買い物に出かけたり、職員が代行して、買い物に行き、使用しやすい物を使用している。以前は、職員も利用者と同じ食卓を囲むことができていたものの、現在は交代で食事を摂りながら、利用者一人ひとりの状況に合わせた見守りやサポートをしている。訪問調査日には、和やかに食事を摂る利用者の様子を見ることができた。また、重度な状態の利用者にも、オープンキッチンでの調理の音や匂いが感じられ、食事前の体操や口腔体操をするなど、食事を楽しみに待つ雰囲気づくりをしている。さらに、職員も同じメニューを食べているため、調理方法などを職員間でお互いにアドバイスし合うこともできている。	
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	献立づくりや食材は業者が持ってきてくれるので食材でチェックなど一緒にしている。					△
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	エプロンたたみなどお手伝いのできる方にはしてもらっている。					
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	好きな食べ物を把握し、お誕生会には希望の食べものを提供している。					
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって音づかいのよいもの等を取り入れている。	○	季節の果物・おやつを含め、なるべく月に1回は行事食を作っている。					○
		f	利用者一人ひとりの咀嚼、嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法として、おいしいような盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	◎	嚥下状態を考え、刻み食などの対応を行っているが食器への盛り付けや色どりにも気を使っている。					
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	◎	本人が使用していたものを入居時に持ってきてもらっている。					◎
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	◎	声掛けや話をしながら助したりサポートしている。					◎
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	◎	ホールにキッチンがあるので匂いや作っている調理内容を伝えたりしながら雰囲気づくりに気を配っている。	◎		◎		
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	◎	毎食の摂取量・水分量を記入して体調管理に努めている。					
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	食事形態や回数、量などは看護師と相談しながら考えている。					
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	△	食材の業者の管理栄養士が献立を考えているが前もって献立表を見て変更してもらったりしている。					○
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	ふきん・まな板の消毒は毎日行っており、食器は食器乾燥機を使用して食中毒予防に努めている。					

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	毎食後口腔ケアや入れ歯洗浄をおこなっており、自分ではできない方の介助を行っている。	/	/	/	前回の目標達成計画に挙げて、利用者の口腔内の清潔保持に取り組んでいる。以前から、毎食後の口腔ケアを行うことができていたものの、自分で磨ける利用者の口腔内の状態までは確認することができていなかったため、毎月8日を口腔ケアの日と決めて、重点的に全ての利用者の口腔内の健康状態を確認することができるようになっている。また、十分な歯磨きが出来ていない利用者には、職員が磨き直しなどのサポートを行い、口腔内の清潔が保てるよう支援している。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	△	虫歯の有無・舌の状態についての把握は出来ない	/	/	○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。		定期的に往診を受けている方もいる。研修で正しい口腔ケアの方法を学び実践している。	/	/	/	
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。		ブラシによる入れ歯の洗浄や洗浄剤を使用している。	/	/	/	
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないよう、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)		自分でできる方もいるができない人は職員が対応。みが直しするときもある。	/	/	○	
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	勉強会や看護師より話を聞いて理解している。	/	/	/	職員は、利用者一人ひとりの排泄パターンを把握して、トイレで排泄することを基本に支援をしている。重度の利用者にも、できる限りスムーズな排泄を促すため、職員が2名体制で、安心安全なトイレ誘導を行っている。また、おむつやパッドなどの排泄用品の使用時には、職員間で利用者の状況や必要性を話し合い、家族に相談の上で使用している。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	排便チェックを行い便秘などの場合等看護師と話し合い原因を探っている。	/	/	/	
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	◎	ライフサイクル・排便チェック表を毎日つけている。	/	/	/	
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々々の状態にあった支援を行っている。	○	本人のその時の状態に合わせおむつ・パッドなど必要性があるか話し合い対応している。	◎	/	◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	看護師を中心に朝の申し送りやミーティングで話し合っており取り組んでいる。	/	/	/	
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	排便チェック表を付けそれに合わせて声掛け誘導している。	/	/	/	
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	本人が理解できるようであれば見本品で試してみたり家族とも相談してその時に合ったものを使用している。	/	/	/	
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	○	その人に適したものを選ぶようにしている。	/	/	/	
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	適度な運動、水分補給に努めているがそれでも自然排便が難しいときは薬に頼りがちになる。	/	/	/	
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	○	週に2回から3回は、入ってもらうようにしている。入浴時間や温度などは本人の希望に添えるようにしている。	◎	/	○	入浴は、午後の時間帯を基本として、曜日は決めずに利用者の状況を観察しながら、週2～3回入浴ができるよう支援している。また、利用者の好みや希望に沿って、湯の温度や湯船に浸かる時間などの柔軟な対応を行い、職員は入浴を楽しめるような支援に努めている。さらに、浴槽に入れない利用者には、足浴やシャワー浴の対応を行うとともに、入浴が難しい利用者には、ベッド上で清拭や洗髪等の介助を行い、清潔を保ちながら、気持ち良く生活が送れるよう支援している。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分に入浴できるよう支援している。	○	リラックスした気分になるように話しかけたり対応している。	/	/	/	
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	衣服の着脱や洗身等出来る事はして頂いている。	/	/	/	
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	拒否されたときは職員が交代し時間を置いて声掛けしたりタイミングをつかむようにしている。	/	/	/	
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	入浴前にはバイタル測定をし、入浴中は全身のチェックを行い入浴後は水分補給をしている。	/	/	/	



項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	介護記録に睡眠状態を記入している。不眠のときには申し送りや伝えている。	/	/	/	夜間眠れない利用者には、リビングでテレビを見てもらったり、職員の近くで過ごしてもらったりするなどの工夫を行い、眠くなった頃を見計らって居室へ誘導をしている。また、夜間眠れずに、日中うとうとするような利用者には、無理をせずに、日中にも居室で休んでもらうようにしている。さらに、職員は日中や夜間の利用者の様子を継続的に観察しながら、看護師や主治医に相談するとともに、利用者の体調面を考慮して、眠剤などの服薬が必要な場合には、看護師から家族に説明して、同意を得てから服用をしている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	眠れないときには話を傾聴したり、眠くなるまでしばらくホールで過ごしてもらい、起きる時間や食事の時間も本人に合わせるようにしている。	/	/	/	
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	職員間また看護師と話し合っており医師に相談している。	/	/	/	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	昼寝をしたりソファで休んでいただいている。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	本人の希望があれば電話をかけているが家族の意向にも併せている。	/	/	/	
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	出来る範囲で介助し希望に添えるようにしている。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	◎	いつでも電話対応はできるようにしている。	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	◎	本人に手渡し、代読したり、壁に貼ったりして目につくようにしている。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力してもらおうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	電話かけていい家族には理解や協力はしてくれているが手紙の支援は出来ていない。	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	理解は出来ているが支払い時は職員が同行し払っている。	/	/	/	
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	買い物先へ協力の働きかけは出来ていないが職員が情報を入手している。	/	/	/	
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	○	お金の所持に関しては家族様と相談しながら対応している。	/	/	/	
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	本人と家族の希望に添えるようにしている。	/	/	/	
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	預り金明細表を毎月送り、家族様に確認していただいている。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	創意工夫してできる範囲で支援している。	◎	/	○	コロナ禍以前は、利用者の希望を叶える「夢企画」で、温泉や故郷、喫茶などに出かけたり、家族と一緒に過ごす時間を作ったりすることができていた。コロナ禍において、様々な制限が設けられ、現在は夢企画の実施を自粛している。また、病院の受診時の付き添いや面会など、可能な範囲で、職員は利用者や家族の思いや要望に応えられるよう心がけた対応をしている。
<b>(3) 生活環境づくり</b>									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入ることができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	行事時にはお手紙でお知らせし、参加してもらったり、玄関は常に開放し、開かれた雰囲気を出している。	◎	○	◎	玄関アプローチには、家族が差し入れた季節の花のプランターが並んでいるほか、睡蓮鉢でメダカが飼育されている。また、開放された玄関の前には、木製のベンチも設置され、利用者や来訪者が休憩できるようにしている。敷地内には手入れされた植栽や菜園があり、さつまいもなどの野菜が植えられているほか、菜園横の東屋には、玉ねぎが干され、利用者の散歩の際には休憩所として活用されることもある。また、事業所の敷地内には、地域の周遊バスの「チョイそこ」の停留所として活用されており、地域住民の出入りがあるなど、立ち寄りやすい雰囲気となっている。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を感じており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない寂風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていない等。)	◎	毎月、壁飾りをかえたり、また行事に合わせた小物などを飾り家庭に在るような雰囲気づくりをしている。	◎	○	◎	玄関ホールには、職員手作りの神輿が飾られ、祭りの雰囲気を醸し出しながら、来訪者を出迎えてくれる。大きな下駄箱には、ユニットごとに利用者の靴が並び、外出時にはベンチに座って靴が履けるようになっている。下駄箱の上に、利用者の作品である干支の木目込みや、手入れされたメダカの水槽、庭に咲いていた生花が生けられている。また、ユニット内は、広々としたリビングに面して、オープンキッチンが設置され、ダイニングセットやソファが置かれているほか、小上がりの畳コーナーもあり、ゆったりした空間となっている。さらに、職員が毎月壁飾りを替えて、季節を感じられるような演出が行われるとともに、季節行事の写真なども多数展示されている。加えて、ユニット内の廊下や動線は片付けられ、掃除も行き届き、清潔感がある。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	毎日の掃除機、モップ、消毒をし、換気や明るさに気を付けている。			◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	季節に花を飾ったり庭の畑で野菜を作り収穫し、食べたりして喜びを感じるような対応をしている			◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	ホールのソファやテーブル席、居室など好きなところで思い思いにゆったり過ごしてもらっている。				
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	居室には今まで使用していたタンスやテレビ鏡台を置いている方もあり居心地よく過ごしていただく工夫している。仏壇を置いている方もいる	○		◎	居室には電動ベッドとエアコン、クローゼットが備え付けられている。利用者はタンスやイス、テレビ、仏壇など、使い慣れた家具や馴染みの物を持ち込むことができるほか、家族の写真飾るなど、一人ひとりに合った個性豊かで、居心地良く過ごせるような居室の工夫が行われている。また、利用者の状況に応じて、床に布団を敷くなどの対応をするとともに、転倒防止などの安全対策に配慮した取組みも行われている。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	トイレやお風呂場など表示したり居室にはそれぞれ表札を付けてもわかるようにしている。			○	建物内部は、バリアフリー構造で、動線上に手すりや設置され、安心安全に移動ができるような整理整頓が行われている。また、居室の表札は立体的に作られ、離れた位置からも見えやすいよう工夫されているほか、自分の居室が分かりにくい利用者の居室の入り口には顔写真を貼り出し、利用者が認識しやすいようにしている。さらに、トイレや浴室などの表示も、分かりやすくなっている。
		b	利用者の活動意欲を醸発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	○	新聞や手作業の道具は手の届くところに置いている。				
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていること)の異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等を理解し、日中は玄関に鍵をかけることも済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	◎	玄関、ユニットの出入り口には鍵はかけておらず入居者の方々はいつでも自由に交流できるようにしている。	◎	◎	◎	職員は、鍵をかけることの弊害を理解しており、日中に玄関やユニットの入り口は開放されている。また、ユニット入り口のドアには、ドアベルが設置され、職員にドアの開閉での利用者等の出入りが分かりやすくなっている。さらに、2階ユニットには、ドアの前に家具調の衝立が設置され、ユニットを出る前のひと工夫が行われ、利用者の安全確保に努めるとともに、職員が対応を行いやすいようになっている。さらに、外出したい利用者には、職員が行動を制止することなく、屋外に出て散歩をするなどの付き添った支援に努めている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	◎	不穏で外に出ていこうとしても否定はせず一緒に出て行ったりしている。				
<b>(4) 健康を維持するための支援</b>									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	◎	入居者基本情報に病歴、現病は記入し、薬剤、注意事項も職員一人一人に熟知できるようにしている。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	◎	いつもと様子が違う時、皮膚の異常、尿便など少しでも変化があれば記録に残し管理者、看護師に報告し早期発見に努めている。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等いつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	異常時はすぐに看護師管理者へ報告。必要時には主治医に連絡している。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	受診が必要な時は家族に連絡し、すぐ連絡するように対応している。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	まずは家族の希望を第一と考えて連絡している。その上で主治医と相談している。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	往診受診の結果は必ず主治医、家族にその都度連絡している。				



項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	入院時、看護要約を渡したり注意事項を入院先に情報提供している。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	個人情報のこともあり施設にはあまり教えてくれることなく家族を通してのことが多い				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	きずいたことは普段より看護師に報告している。看護師は必要に応じて主治医に相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	24時間体制で連絡できるようになっている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	毎日の申し送りそれ以外でも異常時には相談、早期対応している。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	薬剤情報を職員間で共有。変更の時は連絡ノートなどに記入。介護記録にも状態記入している。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	職員間でダブルチェックして間違えないようにしている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	薬が変更になったり追加の時は経過を見て看護師や主治医に報告している。				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	入居時にある程度家族に説明、状態が悪化した時は家族に連絡、今後のことを話し合っている。				事業所には、「看取り介護に関する指針」があり、入居時に、職員は利用者や家族に説明して、家族等の意向を確認している。また、重度化した場合には、主治医や看護師、職員、家族を交えて話し合い、方針を共有している。さらに、看護師のオンコール体制や医療機関との24時間体制の連携が図られ、職員は安心して、利用者や家族に寄り添った支援が行われている。加えて、職員には看取り介護の勉強会を実施している。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	入居時にある程度家族に説明、状態が悪化した時は家族に連絡、今後のことを話し合っている。	○		◎	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	◎	家族に対して出来る事で気ない事を説明し了承を得ている				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	◎	同上。家族説明会で話し合いをしている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	終末期の場合毎日往診があり看護師も入る為状態を細かく連絡している。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	◎	看取りの場合特別に面会を許可し(コロナ禍の為体調には考慮)家族お話を聞くようにしている。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	コロナ禍の為積極的研修は行えてないが毎日感染対策はしている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	コロナウイルスに対して迅速に行動し、感染拡大しないようにしている。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	◎	行政からの連絡事項はその都度職員間に申し送りしている。				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	毎日の体温、体調管理手指消毒、環境設備、消毒換気を行っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
<b>II. 家族との支え合い</b>									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	◎	こすもす便りで本人の様子を文章、写真などで伝えている。本人の表情を観て関わっている。	/	/	/	事業所では、利用者をともに支え合う家族との関係づくりに力を入れ、季節の行事や運営推進会議の際には、全ての家族に案内状を送付して、多くの家族に参加してもらおうとともに、家族同士が交流を図る機会を確保することができていた。コロナ禍において、現在は行事が縮小され、家族と顔を合わせる機会は減少している。毎月発行している「こすもす便り」の送付する際には、担当職員や看護師から、日々の利用者の暮らしの様子や体調面の報告書にスナップ写真を添えて送付をしている。また、2か月に1回開催する運営推進会議の報告書の送付に合わせて、利用者の状況や事業所の活動状況、研修内容、職員の異動等の報告を行い、少しでも、事業所の理解促進が図られるように取り組んでいる。事業所の出来事や職員の異動などを家族に、事業所便り等を活用して報告しているものの、利用者家族等アンケート結果から、十分に理解されていないことが窺えるため、周知方法を職員間で検討することを期待したい。さらに、電話連絡時や来訪時のほか、介護計画の更新時などに、家族から意見や希望の聞き取りをしているものの、特にコロナ禍に入居した利用者家族との関係づくりに難しさを感じており、ホーム長は、「できるだけ対面で話を聞く機会を持ちたい」と考えている。
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	○	すべての行事ではないが運動会、敬老会、クリスマス会等出来るだけ参加してもらえるよう招待状を書いたり電話を入れたりしている。	x	/	○	
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	◎	こすもす便りで職員からと看護師からも様子を記入し写真を付けて日常の様子を伝えている。来訪時にも話をしている。	◎	/	◎	
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	△	よく面会や電話がある家族様には本人の様子を話しているが中には関わりたくない方などもあるので全員にはできていない部分がある。	/	/	/	
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	毎月の「こすもす便り」の中で報告している。	x	/	○	
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	高齢者におけるリスクに関しては書面にて説明をしている。	/	/	/	
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	家族様の面会時、心配なことなどあれば時間を設けて話している	/	/	○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	△	特別大事なことは説明できているがコロナ感染対策でゆくり説明はできていないが理解と納得はして頂いている。	/	/	/	
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	文書にて説明し了承を得ている。	/	/	/	
<b>III. 地域との支え合い</b>									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	いつでも見ることができるよう玄関ロビーに理念・重要事項説明書。運営規定などおいている	/	/	○	コロナ禍以前は、地域の夏祭りや地方祭、市の総合防災訓練、町内の合同避難訓練など、様々な行事に利用者と一緒に参加して、交流を深めることができていた。また、事業所で実施する避難訓練には、多数の地域住民の参加協力を得て、合同訓練を実施することができていた。コロナ禍において、行事が中止され、交流の場が途絶えた中で、地域の役員や民生委員が交代したため、事業所の理解促進を得る機会が持てていない状況となっている。ホーム長は、「入居者が楽しく過ごしている場所として、地域に認知され、根付いてほしい」と考えており、利用者の散歩やセラピー犬「まる」の散歩の際には、積極的に近隣住民に挨拶をするなど、地域に事業所を理解してもらえるよう、継続した働きかけに努めている。さらに、事業所の敷地内を、「チョイそこ」の停留所として地域への開放を行い、ホーム長は、地域住民と関わりが持てる機会に繋がることを期待している。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	◎	お祭りや消防訓練など一緒にしたり挨拶、回覧板等地域に受け入れていただくよう関係を深めている。	/	x	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	○	消防訓練や町内の防災訓練の時は一緒に訓練し見守ってくれている。	/	/	/	
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	○	「チョイそこ」の停留所でもあるが遊びには来てくれない。	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄りもらおうなど、日常的なおつきあいをしている。	○	朝、夕の犬(看板犬)の散歩、清掃活動町内会に入り回覧を回すなどで積極的に挨拶はしている。	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	△	消防訓練時には支援のお願いをしていたがコロナ禍で関わりがなくなっている。	/	/	/	
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	○	地域の方のための「チョイそこ」の停留所にもなっている。子育て協力店にもなっている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取り組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人の参加がある。	○	今までは施設できていたがコロナの為、職員で開催し報告書を送るだけである。	×	/	○	コロナ禍以前は、運営推進会議に、利用者や家族、地域住民に出席してもらって来ていたものの、コロナ禍で面会などの制限が設けられ、現在は、職員のみで全体ミーティングの時間を活用して、会議を開催している。また、会議では、利用者の様子やサービスの実態、評価への取り組み状況のほか、職員研修の内容なども含めて報告を行い、家族や町内会長、民生委員、地域包括支援センター、市担当者等に会議録や資料を配布して、報告をしている。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実態、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	○	報告している	/	◎	◎	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	○	時間帯はほとんど14時から15時にしている。	/	/	○	
<b>IV.より良い支援を行うための運営体制</b>									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	◎	理念はカード型で森歩くことができるように職員に渡している。目につく場所に掲示して常に理念に基づいた支援ができるようにしている。	/	/	/	
		b	利用者、家族、地域のの人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	施設内の目につく場所に掲示している。	○	○	/	
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	年2回の面談記録に目を通し職員の誕生日には手書きでカードを送ってくれる。研修にも一緒に参加している	/	/	/	代表者は、2か月に1回会議等で事業所に来訪があり、ユニットを巡回して、利用者や職員と話しをすることもある。職員の誕生日には、代表者が手書きのメッセージカードを送付するなど、職員とのコミュニケーションが図れるよう努めている。コロナ禍以前は、ピアガーデンやボリング大会など、職員への福利厚生を実施することができていたものの、コロナ禍で開催が自粛された代わりに、職員が個人で利用できる飲食店のチケット配布などが行われている。また、職員のスキルアップへの支援や、メンタルヘルス対策に努めているほか、有給休暇や希望休の取得など、働きやすい職場環境づくりに取り組んでいることもあり、満足度は高く、長年勤務している職員も多い。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	スキルアップできるよう支援してくれている。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	毎月の運営会議や事業所ごとの会議にも参加して職員の状況を把握するように努めている。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	地域密着型サービス協会やグループホーム交流会などの研修にも参加し意識向上に努めている。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	誕生日に手書きメッセージカードを送っている。	○	○	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	◎	研修会を開催したり参加したりできなかった職員にはミーティングで報告会を行って理解するようにしている。	/	/	◎	定期的に、身体拘束廃止委員会を開催され、職員間で話し合うとともに、職員は施設外の研修に参加したり、全体ミーティングの中で伝達研修を実施したりするなど、虐待や不適切なケアの防止の理解をしている。また、ミーティングや朝の申し送りの際にも、ホーム長は不適切なケアなどの話題提供を行い、職員に注意喚起や意識づけをしている。さらに、不適切なケアや気になる言動が見られた場合は、その場で職員同士で注意し合うとともに、ホーム長等へ報告して、ミーティングを活用して職員間で話し合い、注意喚起や再発防止に努めている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	◎	ミーティングや朝の申し送り時に話し合っている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	個人懇談を行って近況の聞き取りをしてストレスを溜めないよう気を付けている。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	身体拘束についてはこまめに注意したり話し合っている。	/	/	/	
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	ミーティングで一人一人意見を出し合うことで反省点やきずきが見えるので本心で話ができるようにしている。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を促している。	○	家族からの要望は現在なし。入居時に身体拘束を行わない支援をしていることを説明している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解したうえで、利用者や家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	○	全て理解はできていないが概ね理解できている。				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	司法書士が関係している方もいる。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	◎	マニュアルを作成し緊急時など研修もしている。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	職員全員が実践力がついているわけではない。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	◎	事故報告やヒヤリハット報告書を記入しミーティングで発表し再発防止に努めている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	◎	毎朝のミーティングで一人一人の状態の報告を行い看護師を中心に取り組んでいる。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	マニュアルがある。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	苦情相談受付用紙に記入できるようにしている。場合によっては市町にも報告をしている。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	なるべく早い対応に心掛ける。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	苦情相談用紙を玄関に置いているがコロナ感染から玄関先で伺ったり、入居者の要望や苦情は会話の中で聴いている。	○		○	事業所玄関には、意見箱を設置しているものの、コロナ禍で来訪者が減少して、ほとんど活用されていない状況となっている。日常会話の中で、職員は利用者から意見を聞き取りをしている。家族からは、電話連絡時や来訪時を活用して、意見や要望を聞くよう努めている。また、ホーム長は、日々ユニットを巡回して、職員から話を聞くとともに、年2回職員との個別面接を行うほか、日々の申し送りやミーティング時にも、意見や提案を聞く機会があり、職員とともに利用者本位の支援を検討している。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	入居時に契約書の中の苦情相談窓口について説明をしている。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	現場で意見を聞くようにしている。				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	◎	面接時に意見を聞いたり、ミーティングでも意見を出し合っている。			◎	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	△	年1回以上は出来ていない。				事業所では、評価結果と目標達成計画を、運営推進会議の中で報告するとともに、職員間で目標達成などに向けて、取り組んだ項目の話し合いをしている。また、運営推進会議での報告は、評価結果や目標達成計画までに留まり、目標達成の取組みの経過や結果の報告までには至っていない。今後は、運営推進会議の案内や会議録で、取組み状況を家族等に報告したり、コロナ禍の収束後には、会議の参加メンバーや家族に、モニターの協力を呼びかけて、意見をもらったりするなど、職員間で検討することを期待したい。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	目標達成計画を職員間で話し合い達成するよう心掛けている。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	△	運営推進会議で報告はしているが、モニターはしてもらっていない。	×	○	△	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	成果の確認としてミーティングで話し合ったり運営推進会議で報告している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	○	マニュアルは作成している。	/	/	/	年2回、様々な災害を想定して、近隣にある系列施設と協力を図りながら、避難訓練を実施をしている。コロナ禍以前は、地域住民の参加協力を得て、合同の避難訓練を実施したり、市や地域の防災訓練に参加協力をしたりするなど、協力体制を図ることもできていた。コロナ禍において、地域住民が参加した合同訓練の実施まではできていない。また、災害対応の取組みについて、運営推進会議や事業所便りを活用して、訓練の実施状況などを報告することができているものの、利用者家族等アンケート結果から、家族に災害への備えが十分に理解されていないことが窺えるため、コロナ禍の収束後には、家族に避難訓練への参加を呼びかけたり、事業所内に訓練の様子の写真を掲載したりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	訓練はしている。	/	/	/	
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	◎	非常用食料等点検をしている。	/	/	/	
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	○	地域の消防訓練と一緒にしているがコロナの関係で中止している。	×	◎	○	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	○	地域の防災訓練は参加している。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	×	研修はなるべく参加するようにしているが、地域に向けての情報発信は出来ていない。	/	/	/	コロナ禍の影響もあり、事業所として、地域への積極的な広報啓発までには至っておらず、地域住民からの相談が寄せられることは少ないものの、家族や居宅介護支援事業所などから相談が寄せられた場合には、快く対応をしている。コロナ禍以前等には、小学校や幼稚園などに出向いて、指人形劇を活用して、認知症の啓発活動を行うこともできていた。コロナ禍の終息後には、関係機関と連携を密に図りながら、地域活動が再開できることを期待したい。また、地区のグループホーム連絡会等に参画するとともに、研修や会議に参加する機会は減っているものの、市行政や地域包括支援センター、他の事業所等との連携を図ることはできている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	△	相談があれば支援したい。	/	△	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	○	お祭りなどできゅけいの場として使用したり「チョイそこ」の停留所にも使用してもらっている。しかしお祭りはコロナでここ2年は開催していない。	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	◎	実習は受け入れている。	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	○	地域の小学校の子育て支援事業やグループホーム交流会内参加して連携を図っている。	/	/	○	

(別表第1)

## サービス評価結果表

### サービス評価項目

(評価項目の構成)

#### I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

#### II.家族との支え合い

#### III.地域との支え合い

#### IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!  
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!  
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 10 月 12 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 25名	(依頼数) 27名
地域アンケート回答数	3名	

※事業所記入

事業所番号	3870103417
事業所名 (ユニット名)	パートナーハウスこすもす Bユニット
記入者(管理者) 氏名	堀内 千恵子
自己評価作成日	令和 4 年 9 月 9 日



(別表第1の2)

<p>【事業所理念】 「幸せの追求」「あるがまま」を笑顔で支える。家族と共に・・・仲間と共に・・・地域と共に・・・</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 ○口腔ケアは前回に口腔ケアは毎食後にしているが、舌の状態など細かいところまでチェックができていなかった為目標計画として取り上げた。話し合いの結果月に1度は(8日)を口腔ケアの日と決め舌の状態まで確認するようにした。月の行事として記入はあるものの個人の介護記録に細かな結果は記入ができていない部分があった。 ○また地域とのかかわりが少なくなっているのでもっとかかわっていきたくしてしたが、やはりコロナ感染の為関わりができなくなっている。その中でも小野久米地域包括が中心となって「ちよいそ」という地域の行動手段になる送迎サービスの停留所にもなっているのでも多少なりとも関わりができていると思っている。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 開設して20年目を迎える事業所は、松山市郊外の閑静な住宅街にあり、周囲にはのどかな田園風景が広がっている。職員は、利用者が家族や地域に支えられながら、笑顔で過ごせることを目指して、日々の支援に取り組んでおり、事業所で実施する避難訓練には、多数の地域住民の協力を得て、合同訓練を実施することもできていた。コロナ禍において、様々な制限が設けられ、家族や地域との接点が減少しているものの、こすもす便りや運営推進会議などを通して、利用者の暮らしの様子や事業所の取組みを発信しながら、継続的な事業所への理解促進が図られるよう努めている。また、職員は利用者に関心感なく、日々の暮らしを楽しみにしながら、自由にしたいことができるような支援に努めている。敷地内にある菜園では、季節の野菜栽培を行い、水やりや草引きなどの作業を通して、利用者の心身機能の維持向上に取り組むとともに、収穫した野菜を調理して季節感を味わっている。また、近隣にある川の土手には、桜並木のほか、彼岸花の群生があり、季節を身近に感じながら、戸外の散歩を楽しんでいる。さらに、事業所で一緒に暮らしているセラピー犬の「まる」は、利用者の癒しの存在となっており、犬の散歩は地域住民との交流の場にも繋がっている。加えて、管理者は、「利用者が楽しく暮らしている場所として、地域に根づいてほしい」と考えており、利用者や職員の穏やかな笑顔が印象的であった。</p>
---	--	--

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくできている ○ほぼできている △時々できている ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
<b>I.その人らしい暮らしを支える</b>									
<b>(1)ケアマネジメント</b>									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	日々の会話を通して思いや意向をくみ取り家族様にも確認をおこなっている。	○	/	○	利用者自身の意思や納得のうえで、入居に繋がるケースは少なく、家族の意向で、入居となることが多い。また、日々の暮らしの中で、職員は利用者や向き合いながら、新しい環境に馴染み、穏やかに暮らしていけるように、一人ひとりの思いや希望を聞き取るようにしている。
b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	本人の表情や行動をよく観察し職員間で話し合ったり、家族様に相談している	/	/	/			
c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	家族様と話し合っている。電話で本人と話してもらい確認している。	/	/	/			
d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	◎	気づいたことを介護記録や連絡ノートに記入し、アセスメントシートにも記入している。	/	/	/			
e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	◎	日頃の会話の中から本人の思いを知りなるべく希望に添えるよう心掛けている。	/	/	/			
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	入居時に今までの生活歴を詳しく聞いて情報を得ている。家族様に確認したり会話の中で把握する。	/	/	○	入居前に、ホーム長等が自宅を訪問して、利用者や家族と面会したり、暮らしの様子を確認したりすることができていたものの、コロナ禍において、現在は自宅等への訪問を自粛している。入院中の利用者の面会も制限され、書面での情報提供は医療の経過のみの記載に留まっており、利用者の暮らしの様子が見えにくく、把握できない場合が多い。また、今までに関わってきた介護支援専門員や、関係機関の担当者などからサービス利用の経過等の情報を得ているものの、暮らしの詳細な情報までは、得られにくい状況となっている。さらに、入居後の関わりの中で、職員は少しずつ、利用者から新たな情報を聞くようにしている。
b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	普段の生活の中で様子観察し職員間で情報を交換しながら状態を把握するようにしている。	/	/	/			
c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に努めている。(生活環境・職員のかかわり等)	◎	一人一人の介護記録や毎日の申し送りや流れや変化は、把握できている。	/	/	/			
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	毎月のミーティングで一人一人について話し合うことで本人の思いを検討している。	/	/	◎	担当職員を中心に、センター方式のアセスメント用紙を活用して、似顔絵や写真を貼り、ADL状況等を項目別に整理された情報が記載されている。また、日々の暮らしの中で、新たに得た情報は、アセスメント用紙に赤字で追記して、職員間で共有するとともに、毎月のミーティングの中でも、利用者一人ひとりの支援方法を、全ての職員で検討をしている。
b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	◎	職員の気づきを話し合うことで課題が見つかりその対策法を考えている。	/	/	/			
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	ミーティングで介護計画を見直しながら本人の思いに添えるようにしている。	/	/	/	◎ 事前に、利用者や家族から意見や意向を聞くとともに、担当職員を中心に得られたアセスメント情報をもとに、計画作成担当者や管理者で話し合い、利用者や家族の意向を尊重した介護計画の原案を作成している。原案の計画をもとに、ミーティングを活用して、全ての職員で話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している。
b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	◎	家族様の面会時などで現状報告を行い話し合っている。家族様と本人の思いが合うこともありその都度話し合うよう心掛けている。	○	/	/			
c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	家族様からの情報を得て支援方法を話し合っている。	/	/	/			
d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	○	家族様によって協力などに差がある。消防訓練などで地域の方々に協力を得ている。	/	/	/			

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	◎	毎月のミーティングで介護計画に沿って話し合いを行っている。	/	/	◎	職員は、ミーティングの中で話し合われた介護計画の内容の把握に努めるとともに、短期目標のサービス内容が、援助計画チェック表に転記され、職員は確認して、共有を行いやすくなっている。また、計画に沿ったケアの実践状況は、援助計画チェック表を活用して、項目ごとにチェックを行うとともに、介護記録等に内容を記載して、日々の記録時や毎月のミーティング時に、職員間で確認をしている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	◎	毎日支援できたが、できなかった場合はどうしてなのかを記録に残している。	/	/	○	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	半年ごとに見直しをしている。入院退院があればその都度見直ししている。	/	/	◎	介護計画は、6か月に1回見直しをしている。新たな要望や変化がない場合にも、毎月実施するミーティングの中で、利用者一人ひとりの現状確認を行い、介護計画の見直しを含めた検討をしている。また、利用者の心身状況に変化が生じた場合には、その都度必要に応じて、関係者で話し合い、現状に即した新たな介護計画を作成している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	○	月1回のミーティングで個人個人の現状確認を行い話し合っている。	/	/	◎	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	入退院、また状態に変化がある場合は新たに計画を立て直している。	/	/	◎	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	定期的に月1回行っている。緊急の場合はその都度話し合っている。	/	/	◎	月1回、全体ミーティングとユニットミーティングを実施して、利用者の現状確認や情報共有、職員間での話し合いをしている。また、緊急案件がある場合には、その都度話し合いの機会を持っている。会議には、全ての職員参加を原則とするともに、職員が参加しやすいように、早めに日程や時間帯を調整して、周知をしている。さらに、参加できなかった職員は、ミーティング記録を確認してもらい、内容を共有している。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ち等を率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	リーダーを中心として全員が司会や書記を担当し意見の出しやすい会議にしている。	/	/	/	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	◎	前もってなるべく全員が参加できる月日を早めに決めていく。参加できない職員は記録を読みサインをする様にしている。	/	/	◎	
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	◎	日々の情報共有は話し合いのみでなく必ず書面記載をして全職員へ通達している。	○	/	◎	日々、朝の申し送り等が口頭で行われている。また、申し送りノートには、業務連絡を含めて、利用者の情報や医療情報がまとめて記載され、職員への伝達に使用されている。また、出勤時等に、内容を確認した職員は、その都度サインする仕組みが整備され、情報共有が図られている。
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	なるべく叶えるようにしている。	/	/	/	飲み物や着る洋服の選択など、職員は利用者から選べるよう工夫した声かけを行いながら、自己決定ができるよう支援している。レクリエーションなどの際にも、一人ひとりがしたいことをできるように、手の届く場所に道具を置いている。訪問調査日にも、新聞やちらしを見たり、ジグソーパズルや積み木をしたりするなど、利用者が思い思いの時間を過ごしている様子を確認することができた。コロナ禍において、地域の秋祭りも中止となったものの、手作りの神輿を玄関に飾り、祭り気分を味わえるよう工夫したり、菜園での活動や戸外の散歩の機会づくりをしたりするなど、外気に触れながら、季節を感じるができるよう取り組んでいる。コロナ禍以前は、いちご狩りやブドウ狩りに出かけ、目を輝かせた利用者の笑顔の写真を見ることができた。また、大学の実習生が来た際には、利用者が孫のような年齢の学生に喜び、普段はしないような話を披露するなど、活き活きとした様子も見られる。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつついている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	飲み物は何が飲みたいかに中どのゲームで遊びたいかなど希望を聞いている。	/	/	◎	
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	食事や入浴名前は希望に添えない時もあるができるだけ本人のペースを大事にしている。	/	/	/	
		d	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	季節の花を挿えたり壁面など季節を感じる雰囲気づくりをしている。	/	/	◎	
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるように支援している。	○	声掛けを多くし、本人の表情、状態を観ながら支援している。	/	/	/	
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であかさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	○	時々適切ではない言葉かけがあるがその都度職員同士で注意するよう心がけている。ミーティング時にも気を付けるように話す。	○	○	○	職員は、人権や尊厳などを内部研修で学ぶほか、頻回にミーティングのテーマに取り上げて話し合い、ホーム長は指導や注意喚起をしている。「ちょっと待って、あとで」などの言葉を発する場面が見られるものの、その後に、職員は利用者により理由や具体的な時間を伝えるよう心がけて、対応をしている。また、居室の出入り際には、必ずノックや声をかけてから入室するほか、不在の際にも、事前に職員は利用者へ声をかけて、了承の上で入室するとともに、一緒に入室するなどの対応をすることもある。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	◎	必ずカーテンをや戸を開めるようにしたり入浴時にはタオルをかけるようにしている。	/	/	/	
		c	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	ノックをして声掛けしてから入室するようにしている。	/	/	◎	
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	個人情報は職員室で保管され漏洩防止についてもミーティングで話し、理解している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けってもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	一方的ではなく利用者一人一人が役割を持ち尊重し合う暮らしができるよう支援している。				職員は、草引きや洗濯物たたみなどを利用者手伝ってもらった場合には、「ありがとうございました」などの感謝の言葉を伝えている。また、利用者同士が励まし合ったり、仕分けた洗濯物を運ぶの手伝ったりすることもある。中には、間違つて他の利用者の居室に入室したり、窓の開閉などの些細な行き違いで言い合いになったりするものの、利用者同士が不快な気持ちにならないように、早期に職員が間に入って対応をしている。さらに、席替えの際にも、当事者のみに留まらず、全ての利用者が納得できるよう工夫するなどの対応が行われている。加えて、仲の良い利用者同士で過ごせるような時間も、職員は大切に支援に努めている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	○	支え合って暮らしていく事の大切さは理解している。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらつた場面をつくる等)。	◎	トラブルが起こらないよう座席を考え、職員が間に入り入居者同士不快にならないよう関わりあえる対応をしている。				
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	◎	トラブルが起こった時にはお互いの話を聴いて不安を取り除き、トラブルが起きない環境を作る。				
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	入居前の調査や家族や知人の面会時に聞いたりしているがコロナが広まってからは詳しく把握できていないことがある。				
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていったりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	中々一緒に出かけられないが電話やリモートなどで関係はつながっている。				
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	○	現在コロナ感染の為外出事は控えている。しかし庭に出て鼻や野菜を観たり近くの土手へ1対1で散歩に行ったりしている。	△	×	○	コロナ禍において、外出制限が設けられ、以前のような外出支援はできなくなったものの、職員は可能な範囲で、利用者が外出できるよう努めている。天気の良い日には、敷地内で日光浴や菜園の世話をしたり、近隣を散歩したり、土手の桜や彼岸花、周辺の田園風景を見に行きなど、職員は利用者に季節を感じてもらえるような支援にも取り組んでいる。また、車いすを使用している利用者も一緒に出かけて、気分転換が図れるよう支援している。さらに、コロナ禍の感染状況を見計らいながら、感染対策を講じた上で、今後、ユニットごとにドライブに出かけて、コスモスなどの見学に行くことを予定している。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	×	家族の外出支援の協力はできていない。外出事は職員で対応している。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	身体的、精神的に変化がある場合は話し合いを行って、なるべく取り除けるよう支援に努めている。				利用者自身に、できることやできそうなことをしてもらえるように、職員は声かけや見守りしながら、待つ支援を心がけている。また、洗濯物たたみや仕分け、片づけなどの手伝いをしてもらった場合には感謝の言葉を伝えたり、ノートに書いてもらった文字を褒めたりするなど、職員は、利用者が意欲的にやりがいを持ちながら継続できるような声かけなどの工夫を行い、心身機能が維持できるように取り組んでいる。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	◎	なるべくトイレにて排泄できるように声掛けや誘導したりむせのある方の食事を刻みやミキサー食にしたりとろみをつけている。健口体操や嚥下体操など取り組んでいる。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	○	出来る事は声掛けや見守りを行っている。しかし入居者がしてほしいと訴えられるときもあるのでやる気の出るような声掛けを行っている。	◎		◎	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	毎日洗濯物を畳んだり裁縫の得意な方には縫物をして頂いている。				塗り絵やお盆拭き、洗濯物たたみ、菜園の草引きなど、利用者一人ひとりが、それぞれの得意なことやできることを継続しながら、職員は役割を担ってもらつとともに、楽しみとなるような支援に努めている。また、事業所ではセラピー犬の「まる」が一緒に生活を送っており、ユニットを巡回して利用者とは触れ合い、膝の上で可愛がるなど、癒しの提供とともに、利用者の共通の話題となっている。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごすように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	日々利用者自身がパズルゲームや音楽を聴いたり新聞を読んだりテレビを観たりとそれぞれに楽しまれている。	○	○	○	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つと捉え、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	◎	それぞれの個性、好みを把握している。				職員は、利用者の自尊心や自立心を尊重して、髭剃りや更衣などのできることをしてもらおうことはできているものの、ちぐはぐな装いや乱れなどが見られる場合には、さりげなく声をかけて、服を着替えてもらうなどの対応をしている。訪問調査日には、整容の乱れや違和感のある装いの利用者の姿は見られなかった。また、重度の利用者は、着脱しやすいような洋服となりがちとなっているものの、職員が色合いなどの本人の好みを考慮した服装を選んでいる。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	○	本人の希望を聞き、散髪時には髪型を聞いたり洋服も着たいものを着てもらっている。				
		c	自己決定がにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	本人の好みなどに希望に添えるように支援している				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しむよう支援している。	○	本人と一緒に考え選び、希望を取り入れている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできさげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	衣服に汚れがある時は居室に行き替えたり乱れがある時はそとと整えてあげる。	○	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	△	コロナ禍で外出は出来ないで職員が希望を聞きできる限りの対応をしている。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	なるべく色の組み合わせなど考えているがどうしても着替えをしやすい服を選びがちになってしまう。			○	
		h	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	◎	一人一人の状態に合わせた食事形態や嚥下訓練(健口体操)を実施している。				
17	食事を楽しむことのできる支援	a	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	×	献立づくりや食材は業者が持ってきてくれるので食材でチェックなど一緒にしている。			△	外部業者の管理栄養士が、栄養バランスの取れた献立を作成するとともに、業者から食材も配達され、各ユニットのキッチンでレシピに沿って職員が調理をしている。コロナ禍以前は、利用者に調理の下ごしらえや配膳などを手伝ってもらうことができていたものの、現在は、感染対策で、職員が手袋を付けて調理を行い、利用者はお盆を拭いてもらうなどの対応に留まっている。月1回、季節の行事食を計画され、その際には食材の配達を止めて、利用者の希望を取り入れた献立を立て、職員が食材の買い出しに出かけて調理した食事を提供している。利用者の誕生日には、職員がケーキを手作りして提供するとともに、行事食の際には、たこ焼きづくりなどを利用者と一緒に作り、大変喜ばれている。茶碗や湯飲み、箸等は、自宅から使い慣れた物を持参してもらったり、利用者専用の物を使用している。破損した場合は、家族に用意してもらったり、利用者と一緒に買い物に出かけたり、職員が代行して、買い物に行き、使用しやすい物を使用している。以前は、職員も利用者と同じ食卓を囲むことができていたものの、現在は交代で食事を摂りながら、利用者一人ひとりの状況に合わせた見守りやサポートをしている。訪問調査日には、和やかに食事をする利用者の様子を見ることができた。また、重度な状態の利用者にも、オープンキッチンでの調理の音や匂いが感じられ、食事前の体操や口腔体操をするなど、食事を楽しみに待つ雰囲気づくりをしている。さらに、職員も同じメニューを食べているため、調理方法などを職員間でお互いにアドバイスし合うこともできている。
		b	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	×	高齢で調理や片づけは難しいがお盆ふきなど出来る事はして頂き達成感が味わえるような言葉掛けに心掛けている。				
		c	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	入居者様に伺ったり家族様に聞いて確認している。				
		d	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって音づかいのよいもの等を取り入れている。	◎	誕生には食べたいものを作ったり季節の食材を取り入れた行事食を作るようにしている。			○	
		e	利用者一人ひとりの咀嚼、嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法として、おいしいような盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	嚥下状態を考え、刻み食などの対応を行っているが食器への盛り付けや色どりにも気を使っている。				
		f	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	◎	本人が使用していたものを入居時に持ってきてもらっている。			◎	
		g	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	○	コロナ禍なので職員は別に食べているが、声掛けや話をしながら介助したりサポートしている。			◎	
		h	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	ホールにキッチンがあるので匂いや作っている調理内容を伝えたりしながら雰囲気づくりに気を配っている。	◎		◎	
		i	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	◎	カロリー計算された食材を使用し、毎食の摂取量・水分量を記入して体調管理に努めている。				
		j	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	○	食事形態や回数、量などは看護師と相談しながら考えている。				
		k	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	◎	食材の業者の管理栄養士が献立を考えているが前もって献立表を見て変更してもらったりしている。			○	
		l	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	ふきん・まな板の消毒は毎日行って、食器は食器乾燥機を使用して食中毒予防に努めている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	毎食後口腔ケアや入れ歯洗浄をおこなっており、自分ではできない方の介助を行っている。				前回の目標達成計画に挙げて、利用者の口腔内の清潔保持に取り組んでいる。以前から、毎食後の口腔ケアを行うことができていたものの、自分で磨ける利用者の口腔内の状態までは確認することができていなかったため、毎月8日を口腔ケアの日と決めて、重点的に全ての利用者の口腔内の健康状態を確認することができるようになっている。また、十分な歯磨きができない利用者には、職員が磨き直しなどのサポートを行い、口腔内の清潔が保てるよう支援している。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	◎	毎月8日は口腔チェックを念入りするよう日を決めて行っている。			○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	△	定期的に往診を受けている方もいる。研修で正しい口腔ケアの方法を学び実践している。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	◎	夕食後の口腔ケア時にそばについて支援している。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	◎	自分でできる方もいるができない人は職員が対応。みが直しするときもある。			○	
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	◎	出来るだけ布パンツを使用できる方はトイレ誘導をしたり声掛けをしたり失敗がないようにしている。なるべくならそれを維持したい。				職員は、利用者一人ひとりの排泄パターンを把握して、トイレで排泄することを基本的に支援をしている。重度の利用者にも、できる限りスムーズな排泄を促すため、職員が2名体制で、安心安全なトイレ誘導を行っている。また、おむつやパッドなどの排泄用品の使用時には、職員間で利用者の状況や必要性を話し合い、家族に相談の上で使用している。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	◎	排便チェックを行い便秘などの場合等看護師と話し合い原因を探っている。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	◎	ライフサイクル・排便チェック表を毎日つけている。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々々の状態にあった支援を行っている。	○	出来るだけトイレで排泄できるよう支援している。本人のその時の状態に合わせおむつ・パッドなど必要性があるか話し合い対応している。	◎		◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	看護師を中心に朝の申し送りやミーティングで話し合っており取り組んでいる。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	◎	排泄の間隔があきすぎないよう声掛けをしてまた排便・排尿チェック表を付けそれに合わせて声掛け誘導している。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	入居者様の状態や家族様と相談し気持ちよく使用できるものを選ぶようにしている。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	◎	日中や夜間帯等その場面に合わせて使用している。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	適度な運動、水分補給に努めているがそれでも自然排便が難しいときは薬に頼りがちになる。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	◎	週に2回から3回は、入ってもらうようにしている。入浴時間や温度などは本人の希望に添えるようにしている。	◎		○	入浴は、午後の時間帯を基本として、曜日は決めずに利用者の状況を観察しながら、週2～3回入浴ができるよう支援している。また、利用者の好みや希望に沿って、湯の温度や湯船に浸かる時間などの柔軟な対応を行い、職員は入浴を楽しめるような支援に努めている。さらに、浴槽に入れない利用者には、足浴やシャワー浴の対応を行うとともに、入浴が難しい利用者には、ベッド上で清拭や洗髪等の介助を行い、清潔を保ちながら、気持ち良く生活が送れるよう支援している。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分に入浴できるよう支援している。	◎	リラックスした気分になるように話しかけたり対応している。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	衣服の着脱や洗身等出来る事はして頂いている。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	◎	拒否されたときは職員が交代し時間を置いて声掛けしたりタイミングをつかむようにしている。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	入浴前にはバイタル測定をし、入浴中は全身のチェックを行い入浴後は水分補給をしている。				



項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	介護記録に睡眠状態を記入している。不眠のときには申し送りや伝えている。	/	/	/	夜間眠れない利用者には、リビングでテレビを見てもらったり、職員の近くで過ごしてもらったりするなどの工夫を行い、眠くなった頃を見計らって居室へ誘導をしている。また、夜間眠れずに、日中うとうとするような利用者には、無理をせずに、日中にも居室で休んでもらうようにしている。さらに、職員は日中や夜間の利用者の様子を継続的に観察しながら、看護師や主治医に相談するとともに、利用者の体調面を考慮して、眠剤などの服薬が必要な場合には、看護師から家族に説明して、同意を得てから服用をしている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	眠れないときには話を傾聴したり、眠くなるまでしばらくホールで過ごしてもらい、起きる時間や食事の時間も本人に合わせるようにしている。	/	/	/	
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	ケアプランに沿って支援を行っている。日々の過ごし方や出来事も変化があれば相談している。	/	/	/	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	昼寝をしたりソファで休んでいただいている。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	電話の取次ぎや本人の希望が本人の希望があれば電話をかけている。	/	/	/	
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	出来る範囲で介助し希望に添えるようにしている。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	いつでも電話対応はできるようにしている。	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	◎	本人に手渡し、代読したり、壁に貼ったりして目につくようにしている。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	◎	電話かけていい家族には理解や協力はしてくれているが手紙の支援は出来ていない。	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	理解は出来ているが支払い時は職員が同行し払っている。	/	/	/	
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	○	買い物先へ協力の働きかけは出来ていないが希望を伺って代行で購入している。	/	/	/	
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	○	お金の所持に関しては家族様と相談しながら対応している。	/	/	/	
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	◎	本人と家族の希望に添えるようにしている。	/	/	/	
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	◎	預り金明細表を毎月送り、家族様に確認していただいている。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	◎	創意工夫してできる範囲で支援している。	◎	/	○	コロナ禍以前は、利用者の希望を叶える「夢企画」で、温泉や故郷、喫茶などに出かけたり、家族と一緒に過ごす時間を作ったりすることができていた。コロナ禍において、様々な制限が設けられ、現在は夢企画の実施を自粛している。また、病院の受診時の付き添いや面会など、可能な範囲で、職員は利用者や家族の思いや要望に応えられるよう心がけた対応をしている。
<b>(3) 生活環境づくり</b>									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入ることができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	◎	日中玄関はあけている。玄関や畑には花を植えたり畑では野菜を作っている。	◎	○	◎	玄関アプローチには、家族が差し入れた季節の花のプランターが並んでいるほか、睡蓮鉢でメダカが飼育されている。また、開放された玄関の前には、木製のベンチも設置され、利用者や来訪者が休憩できるようになっている。敷地内には手入れされた植栽や菜園があり、さつまいもなどの野菜が植えられているほか、菜園横の東屋には、玉ねぎが干され、利用者の散歩の際には休憩所として活用されることもある。また、事業所の敷地内には、地域の周遊バスの「チョイそこ」の停留所として活用されており、地域住民の出入りがあるなど、立ち寄りやすい雰囲気となっている。



項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を感じており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない寂風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていない等。)	◎	共用の空間には行事の写真や壁画に月ごとの飾りつけで季節を感じるよう工夫している。	◎	○	◎	玄関ホールには、職員手作りの神輿が飾られ、祭りの雰囲気を醸し出しながら、来訪者を出迎えてくれる。大きな下駄箱には、ユニットごとに利用者の靴が並び、外出時にはベンチに座って靴が履けるようになっている。下駄箱の上に、利用者の作品である干支の木目込みや、手入れされたメダカの水槽、庭に咲いていた生花が生けられている。また、ユニット内は、広々としたリビングに面して、オープンキッチンが設置され、ダイニングセットやソファが置かれているほか、小上がりの畳コーナーもあり、ゆったりとした空間となっている。さらに、職員が毎月壁飾りを替えて、季節を感じられるような演出が行われるとともに、季節行事の写真なども多数展示されている。加えて、ユニット内の廊下や動線は片付けられ、掃除も行き届き、清潔感がある。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	毎日のモップ掛け手すり拭きを行い感染予防にも注意を払っている。			◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	◎	行事の写真などを飾っている。ホールでは食事つくりでにおいを感じてもらい何が出来るかの期待を持ってもらう。			◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	◎	居室で過ごす方やホールで過ごしたい方などそれぞれ好きなところで過ごしている。				
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	◎	居室に歯テレビ、家で使っていたタンスまた仏壇を置いて心地よく過ごせるようにしている。	○		◎	居室には電動ベッドとエアコン、クローゼットが備え付けられている。利用者はタンスやイス、テレビ、仏壇など、使い慣れた家具や馴染みの物を持ち込むことができるほか、家族の写真飾るなど、一人ひとりに合った個性豊かで、居心地良く過ごせるような居室の工夫が行われている。また、利用者の状況に応じて、床に布団を敷くなどの対応をするとともに、転倒防止などの安全対策に配慮した取組みも行われている。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	◎	居室入り口には表札を付けてお風呂場トイレなどわかりやすいようにしている。			○	建物内部は、バリアフリー構造で、動線に手すりや設置され、安心安全に移動ができるような整理整頓が行われている。また、居室の表札は立体的に作られ、離れた位置からも見えやすいよう工夫されているほか、自分の居室が分かりにくい利用者の居室の入り口には顔写真を貼り出し、利用者が認識しやすいようにしている。さらに、トイレや浴室などの表示も、分かりやすくなっている。
		b	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	◎	新聞・パズル・本等すぐ手の届くところに置いている。				
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていること、異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけることも済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	◎	玄関・ユニットの入り口は鍵はかけておらず交流は自由にできる。	◎	◎	◎	職員は、鍵をかけることの弊害を理解しており、日中に玄関やユニットの入り口は開放されている。また、ユニット入り口のドアには、ドアベルが設置され、職員にドアの開閉での利用者等の出入りが分かりやすくなっている。さらに、2階ユニットには、ドアの前に家具調の衝立が設置され、ユニットを出る前のひと工夫が行われ、利用者の安全確保に努めるとともに、職員が対応を行いやすいようになっている。さらに、外出したい利用者には、職員が行動を制止することなく、屋外に出て散歩をするなどの付き添った支援に努めている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	外に出ようとする入居者には必ず一緒に行くようにしている。				
<b>(4) 健康を維持するための支援</b>									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	◎	入居者基本情報に病歴、現病は記入し、薬剤、注意事項も職員一人一人に熟知できるようにしている。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	◎	いつもと様子が違う時、皮膚の異常、尿便など少しでも変化があれば記録に残し管理者、看護師に報告し早期発見に努めている。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等いつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	○	異常時はすぐに看護師管理者へ報告。必要時には主治医に連絡している。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受診状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	受診が必要な時は家族に連絡し、すぐ連絡するように対応している。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	まずは家族の希望を第一に考えて連絡している。その上で主治医と相談している。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	◎	往診受診の結果は必ず主治医、家族にその都度連絡している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	入院時、看護要約を渡したり注意事項を入院先に情報提供している。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	○	個人情報のこともあり施設にはあまり教えてくれることなく家族を通してのことが多い				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	きずいたことは普段より看護師に報告している。看護師は必要に応じて主治医に相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	24時間体制で連絡できるようになっている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	毎日の申し送りそれ以外でも異常時には相談、早期対応している。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	薬剤情報を職員間で共有。変更の時は連絡ノートなどに記入。介護記録にも状態記入している。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	職員間でダブルチェックして間違えないようにしている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	薬が変更になったり追加の時は経過を見て看護師や主治医に報告している。				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	入居時にある程度家族に説明、状態が悪化した時は家族に連絡、今後のことを話し合っている。				事業所には、「看取り介護に関する指針」があり、入居時に、職員は利用者や家族に説明して、家族等の意向を確認している。また、重度化した場合には、主治医や看護師、職員、家族を交えて話し合い、方針を共有している。さらに、看護師のオンコール体制や医療機関との24時間体制の連携が図られ、職員は安心して、利用者や家族に寄り添った支援が行われている。加えて、職員には看取り介護の勉強会を実施している。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	家族説明会を開き本人・家族の意向を確認、職員間にも申し送りしている。	○		◎	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	◎	家族に対して出来る事で気ない事を説明し了承を得ている				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	◎	同上。家族説明会で話し合いをしている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を固めながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	終末期の場合毎日往診があり看護師も入る為状態を細かく連絡している。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	◎	看取りの場合特別に面会を許可し(コロナ禍の為体調には考慮)家族の話を聞くようにしている。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	コロナ禍の為積極的に研修は行えてないが毎日感染対策はしている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	コロナウイルスに対して迅速に行動し、感染拡大しないようにしている。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	◎	行政からの連絡事項はその都度職員間に申し送りしている。				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	毎日の体温、体調管理手指消毒、環境設備、消毒換気を行っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
<b>II. 家族との支え合い</b>									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	◎	こすもす便りで本人の様子を文章、写真などで伝えている。本人の表情を観て関わっている。	/	/	/	事業所では、利用者をともに支え合う家族との関係づくりに力を入れ、季節の行事や運営推進会議の際には、全ての家族に案内状を送付して、多くの家族に参加してもらうとともに、家族同士が交流を図る機会を確保することができていた。コロナ禍において、現在は行事が縮小され、家族と顔を合わせる機会は減少している。毎月発行している「こすもす便り」の送付する際には、担当職員や看護師から、日々の利用者の暮らしの様子や体調面の報告書にスナップ写真を添えて送付をしている。また、2か月に1回開催する運営推進会議の報告書の送付に合わせて、利用者の状況や事業所の活動状況、研修内容、職員の異動等の報告を行い、少しでも、事業所の理解促進が図られるように取り組んでいる。事業所の出来事や職員の異動などを家族に、事業所便り等を活用して報告しているものの、利用者家族等アンケート結果から、十分に理解されていないことが窺えるため、周知方法を職員間で検討することを期待したい。さらに、電話連絡時や来訪時のほか、介護計画の更新時などに、家族から意見や希望の聞き取りをしているものの、特にコロナ禍に入居した利用者家族との関係づくりに難しさを感じており、ホーム長は、「できるだけ対面で話を聞く機会を持ちたい」と考えている。
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	○	すべての行事ではないが運動会、敬老会、クリスマス会等出来るだけ参加してもらえるよう招待状を書いたり電話を入れたりしている。	x	/	○	
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	◎	こすもす便りで職員からと看護師からも様子を記入し写真を付けて日常の様子を伝えている。来訪時にも話をしている。	◎	/	◎	
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	よく面会や電話がある家族様には本人の様子を話しているが中には関わりたくない方などもあるので全員にはできていない部分がある。	/	/	/	
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	毎月の「こすもす便り」の中で報告している。	x	/	○	
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	◎	高齢者におけるリスクに関しては書面にて説明をしている。	/	/	/	
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	家族様の面会時、心配なことなどあれば時間を設けて話している	/	/	○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	特別大事なことは説明できているがコロナ感染対策でゆくり説明はできていないが理解と納得はして頂いている。	/	/	/	
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	◎	文書にて説明し了承を得ている。	/	/	/	
<b>III. 地域との支え合い</b>									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域、事業所が所在する市町の日常生活圏、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	いつでも見ることができるよう玄関ロビーに理念・重要事項説明書。運営規定などおいている	/	○	/	
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	○	お祭りや消防訓練など一緒にしたり挨拶、回覧板等地域に受け入れていただくよう関係を深めている。	/	x	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	○	消防訓練や町内の防災訓練の時は一緒に訓練し見守ってくれている。	/	/	/	
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	△	「チョイそこ」の停留所でもあるが遊びには来てくれない。	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄りもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	○	朝、夕の犬(看板犬)の散歩、清掃活動町内会に入り回覧を回すなどで積極的に挨拶はしている。	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	△	消防訓練時には支援のお願いをしていたがコロナ禍で関わりがなくなっている。	/	/	/	
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	○	地域の方のための「チョイそこ」の停留所にもなっている。子育て協力店にもなっている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取り組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人の参加がある。	○	今までは施設できていたがコロナの為、職員で開催し報告書を送るだけである。	×	/	○	コロナ禍以前は、運営推進会議に、利用者や家族、地域住民に出席してもらって来ていたものの、コロナ禍で面会などの制限が設けられ、現在は、職員のみで全体ミーティングの時間を活用して、会議を開催している。また、会議では、利用者の様子やサービスの実態、評価への取り組み状況のほか、職員研修の内容なども含めて報告を行い、家族や町内会長、民生委員、地域包括支援センター、市担当者等に会議録や資料を配布して、報告をしている。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実態、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案等を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	○	報告している	/	◎	◎	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	○	時間帯はほとんど14時から15時にしている。	/	/	○	
<b>IV.より良い支援を行うための運営体制</b>									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	理念はカード型で森歩くことができるように職員に渡している。目につく場所に掲示して常に理念に基づいた支援ができるようにしている。	/	/	/	
		b	利用者、家族、地域のの人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	施設内の目につく場所に掲示している。	○	○	/	
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	年2回の面談記録に目を通し職員の誕生日には手書きでカードを送ってくれる。研修にも一緒に参加している	/	/	/	代表者は、2か月に1回会議等で事業所に来訪があり、ユニットを巡回して、利用者や職員と話しをすることもある。職員の誕生日には、代表者が手書きのメッセージカードを送付するなど、職員とのコミュニケーションが図れるよう努めている。コロナ禍以前は、ピアガーデンやボリング大会など、職員への福利厚生を実施することができていたものの、コロナ禍で開催が自粛された代わりに、職員が個人で利用できる飲食店のチケット配布などが行われている。また、職員のスキルアップへの支援や、メンタルヘルス対策に努めているほか、有給休暇や希望休の取得など、働きやすい職場環境づくりに取り組んでいることもあり、満足度は高く、長年勤務している職員も多い。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	◎	スキルアップできるよう支援してくれている。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	毎月の運営会議や事業所ごとの会議にも参加して職員の状況を把握するように努めている。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	地域密着型サービス協会やグループホーム交流会などの研修にも参加し意識向上に努めている。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	誕生日に手書きメッセージカードを送っている。	○	○	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	◎	研修会を開催したり参加したりできなかった職員にはミーティングで報告会を行って理解するようにしている。	/	/	◎	定期的に、身体拘束廃止委員会を開催され、職員間で話し合うとともに、職員は施設外の研修に参加したり、全体ミーティングの中で伝達研修を実施したりするなど、虐待や不適切なケアの防止の理解をしている。また、ミーティングや朝の申し送りの際にも、ホーム長は不適切なケアなどの話題提供を行い、職員に注意喚起や意識づけをしている。さらに、不適切なケアや気になる言動が見られた場合は、その場で職員同士で注意し合うとともに、ホーム長等へ報告して、ミーティングを活用して職員間で話し合い、注意喚起や再発防止に努めている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	◎	ミーティングや朝の申し送り時に話し合っている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	個人懇談を行って近況の聞き取りをしてストレスを溜めないよう気を付けている。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	○	身体拘束についてはこまめに注意したり話し合っている。	/	/	/	
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	ミーティングで一人一人意見を出し合うことで反省点やきずきが見えるので本心で話ができるようにしている。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を促している。	○	家族からの要望は現在なし。入居時に身体拘束を行わない支援をしていることを説明している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解したうえで、利用者や家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	○	全て理解はできていないが概ね理解できている。				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	司法書士が関係している方もいる。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	◎	マニュアルを作成し緊急時など研修もしている。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	職員全員が実践力がついているわけではない。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	◎	事故報告やヒヤリハット報告書を記入しミーティングで発表し再発防止に努めている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	◎	毎朝のミーティングで一人一人の状態の報告を行い看護師を中心に取り組んでいる。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	マニュアルがある。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	苦情相談受付用紙に記入できるようにしている。場合によっては市町にも報告をしている。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	なるべく早い対応に心掛けている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	苦情相談用紙を玄関に置いているがコロナ感染から玄関先で伺ったり、入居者の要望や苦情は会話の中で聴いている。	○		○	事業所玄関には、意見箱を設置しているものの、コロナ禍で来訪者が減少して、ほとんど活用されていない状況となっている。日常会話の中で、職員は利用者から意見を聞き取りをしている。家族からは、電話連絡時や来訪時を活用して、意見や要望を聞くよう努めている。また、ホーム長は、日々ユニットを巡回して、職員から話を聞くとともに、年2回職員との個別面接を行うほか、日々の申し送りやミーティング時にも、意見や提案を聞く機会があり、職員とともに利用者本位の支援を検討している。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	入居時に契約書の中の苦情相談窓口について説明をしている。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	現場で意見を聞くようにしている。				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	面接時に意見を聞いたり、ミーティングでも意見を出し合っている。			◎	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	年1回以上は出来ていない。				事業所では、評価結果と目標達成計画を、運営推進会議の中で報告するとともに、職員間で目標達成などに向けて、取り組んだ項目の話し合いをしている。また、運営推進会議での報告は、評価結果や目標達成計画までに留まり、目標達成の取組みの経過や結果の報告までには至っていない。今後は、運営推進会議の案内や会議録で、取組み状況を家族等に報告したり、コロナ禍の収束後には、会議の参加メンバーや家族に、モニターの協力を呼びかけて、意見をもらったりするなど、職員間で検討することを期待したい。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	目標達成計画を職員間で話し合い達成するよう心掛けている。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	○	運営推進会議で報告はしているが、モニターはしてもらっていない。	×	○	△	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	成果の確認としてミーティングで話し合ったり運営推進会議で報告している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	○	マニュアルは作成している。				年2回、様々な災害を想定して、近隣にある系列施設と協力を図りながら、避難訓練を実施をしている。コロナ禍以前は、地域住民の参加協力を得て、合同の避難訓練を実施したり、市や地域の防災訓練に参加協力をしたりするなど、協力体制を図ることもできていた。コロナ禍において、地域住民が参加した合同訓練の実施まではできていない。また、災害対応の取組みについて、運営推進会議や事業所便りを活用して、訓練の実施状況などを報告することができているものの、利用者家族等アンケート結果から、家族に災害への備えが十分に理解されていないことが窺えるため、コロナ禍の収束後には、家族に避難訓練への参加を呼びかけたり、事業所内に訓練の様子を掲載したりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	訓練はしている。				
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	◎	非常用食料等点検をしている。				
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	○	地域の消防訓練と一緒にいるがコロナの関係で中止している。	×	◎	○	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	○	地域の防災訓練は参加している。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	△	研修はなるべく参加するようにしているが、地域に向けての情報発信は出来ていない。				コロナ禍の影響もあり、事業所として、地域への積極的な広報啓発までには至っておらず、地域住民からの相談が寄せられることは少ないものの、家族や居宅介護支援事業所などから相談が寄せられた場合には、快く対応をしている。コロナ禍以前等には、小学校や幼稚園などに出向いて、指人形劇を活用して、認知症の啓発活動を行うこともできていた。コロナ禍の終息後には、関係機関と連携を密に図りながら、地域活動が再開できることを期待したい。また、地区のグループホーム連絡会等に参画するとともに、研修や会議に参加する機会は減っているものの、市行政や地域包括支援センター、他の事業所等との連携を図ることはできている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	相談があれば支援したい。		△	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	○	お祭りなどで休憩の場として使用したり「チョイそこ」の停留所にも使用してもらっている。しかしお祭りはコロナでここ2年は開催していない。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	○	実習は受け入れている。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	○	地域の小学校の子育て支援事業やグループホーム交流会内参加して連携を図っている。			○	



(別表第1)

## サービス評価結果表

### サービス評価項目

(評価項目の構成)

#### I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

#### II.家族との支え合い

#### III.地域との支え合い

#### IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!  
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!  
ジャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 10 月 12 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 25名	(依頼数) 27名
地域アンケート回答数	3名	

※事業所記入

事業所番号	3870103417
事業所名 (ユニット名)	パートナーハウスこすもす Cユニット
記入者(管理者) 氏名	上永 雅樹
自己評価作成日	令和 4 年 9 月 9 日

(別表第1の2)

<p>【事業所理念】 「幸せの追求」「あるがまま」を笑顔で支える。家族と共に・・・仲間と共に・・・地域と共に・・・</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 ○口腔ケアは前回に口腔ケアは毎食後にしているが、舌の状態など細かいところまでチェックができていなかったが目標計画として取り上げた。話し合いの結果月に1度は(8日)を口腔ケアの日と決め舌の状態まで確認するようにした。 ○月の行事として記入はあるものの個人の介護記録に細かい結果は記入ができていない部分があった。また地域とのかかわりが少なくなっているのだからかかわっていきたくてしたが、やはりコロナ感染の為関わりができていない。その中でも小野久米地域包括が中心となって「ちよいそこ」という地域の行動手段になる送迎サービスの停留所にもなっているのでも多少なりとも関わりができていていると思っている。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 開設して20年目を迎える事業所は、松山市郊外の閑静な住宅街にあり、周囲にはのどかな田園風景が広がっている。職員は、利用者が家族や地域に支えられながら、笑顔で過ごせることを目指して、日々の支援に取り組んでおり、事業所で実施する避難訓練には、多数の地域住民の協力を得て、合同訓練を実施することもできていた。コロナ禍において、様々な制限が設けられ、家族や地域との接点が減少しているものの、こすもす便りや運営推進会議などを通して、利用者の暮らしの様子や事業所の取組みを発信しながら、継続的な事業所への理解促進が図られるよう努めている。また、職員は利用者に関心感なく、日々の暮らしを楽しみにしながら、自由にしたいことができるような支援に努めている。敷地内にある菜園では、季節の野菜栽培を行い、水やりや草引きなどの作業を通して、利用者の心身機能の維持向上に取り組むとともに、収穫した野菜を調理して季節感を味わっている。また、近隣にある川の土手には、桜並木のほか、彼岸花の群生があり、季節を身近に感じながら、戸外の散歩を楽しんでいる。さらに、事業所で一緒に暮らしているセラピー犬の「まる」は、利用者の癒しの存在となっており、犬の散歩は地域住民との交流の場にも繋がっている。加えて、管理者は、「利用者が楽しく暮らしている場所として、地域に根づいてほしい」と考えており、利用者や職員の穏やかな笑顔が印象的であった。</p>
---	--	--

評価結果表

【実施状況の評価】

◎よくできている ○ほぼできている △時々できている ×ほとんどできていない

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
<b>I.その人らしい暮らしを支える</b>									
<b>(1)ケアマネジメント</b>									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	会話の中から本人の思いなども知り希望に添えるように努めている。	○	/	○	利用者自身の意思や納得のうえで、入居に繋がるケースは少なく、家族の意向で、入居となることが多い。また、日々の暮らしの中で、職員は利用者や向き合いながら、新しい環境に馴染み、穏やかに暮らしていけるように、一人ひとりの思いや希望を聞き取るようにしている。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	職員間の情報交換や家族様に相談することで本人を知るように努めている。	/	/	/	
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	面会できない方や来られない方もいるができるだけ話を伺っている。	/	/	/	
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	◎	ミーティングで報告し合ったり介護記録やアセスメントシートなど記入している	/	/	/	
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落としがないように留意している。	○	職員間の情報交換・ミーティングなどで話し合い間違いがないよう留意している。	/	/	/	
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	入居前の事前調査で情報を得るがわからないことは入居してからmの本人や家族様に聞いていいる。	/	/	○	入居前に、ホーム長等が自宅を訪問して、利用者や家族と面会したり、暮らしの様子を確認したりすることができていたものの、コロナ禍において、現在は自宅等への訪問を自粛している。入院中の利用者の面会も制限され、書面での情報提供は医療の経過のみの記載に留まっており、利用者の暮らしの様子が見えにくく、把握できない場合が多い。また、今までに関わってきた介護支援専門員や、関係機関の担当者などからサービス利用の経過等の情報を得ているものの、暮らしの詳細な情報までは、得られにくい状況となっている。さらに、入居後の関わりの中で、職員は少しずつ、利用者から新たな情報を聞くようにしている。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態(身体面・精神面)や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	○	安心して過ごしていただくよう、話を聞きながら出来る事などを探り、出来る力を引き出すよう支援している。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握に努めている。(生活環境・職員のかかわり等)	○	介護記録や申し送り代替把握できているが何か変化があればすぐに看護師・ホーム長に報告するようにしている。	/	/	/	
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	○	何を希望されているかなどミーティング内で話し合いをして思いを知るようにしている。	/	/	◎	担当職員を中心に、センター方式のアセスメント用紙を活用して、似顔絵や写真を貼り、ADL状況等を項目別に整理された情報が記載されている。また、日々の暮らしの中で、新たに得た情報は、アセスメント用紙に赤字で追記して、職員間で共有するとともに、毎月のミーティングの中でも、利用者一人ひとりの支援方法を、全ての職員で検討している。
		b	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題の把握に努めている。	○	話し合いの中で課題が見つければまた職員同士話し合い、良い結果になるよう努めている。	/	/	/	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	◎	毎月のミーティングで介護計画表を確認しながら本人の思いに添えるようにしている。	/	/	/	事前に、利用者や家族から意見や意向を聞くとともに、担当職員を中心に得られたアセスメント情報をもとに、計画作成担当者や管理者で話し合い、利用者や家族の意向を尊重した介護計画の原案を作成している。原案の計画をもとに、ミーティングを活用して、全ての職員で話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して介護計画を作成している。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	本人に聞いた言いえない場合は普段の生活の中から世にしたり職員や家族様と話し合っている。	○	/	◎	
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	看護師や家族様と相談して支援方法を話し合っている。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	○	地域の人たちの協力体制は消防訓練などでお願いしている。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	◎	毎月のミーティングで介護計画に沿って話し合いを行っている。			◎	職員は、ミーティングの中で話し合われた介護計画の内容の把握に努めるとともに、短期目標のサービス内容が、援助計画チェック表に転記され、職員は確認して、共有を行いやすくなっている。また、計画に沿ったケアの実践状況は、援助計画チェック表を活用して、項目ごとにチェックを行うとともに、介護記録等に内容を記載して、日々の記録時や毎月のミーティング時に、職員間で確認をしている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを個別具体的に記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	◎	毎日支援できたが、できなかった場合はどうしてなのかを記録に残している。			○	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	半年ごとに見直しをしている。入院退院があればその都度見直ししている。			◎	介護計画は、6か月に1回見直しをしている。新たな要望や変化がない場合にも、毎月実施するミーティングの中で、利用者一人ひとりの現状確認を行い、介護計画の見直しを含めた検討をしている。また、利用者の心身状況に変化が生じた場合には、その都度必要に応じて、関係者で話し合い、現状に即した新たな介護計画を作成している。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	月1回のミーティングで個人個人の現状確認を行い話し合っている。			◎	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	○	入退院、また状態に変化がある場合は新たに計画を立て直している。			◎	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	○	定期的に月1回行っている。緊急の場合はその都度話し合っている。			◎	月1回、全体ミーティングとユニットミーティングを実施して、利用者の現状確認や情報共有、職員間での話し合いをしている。また、緊急案件がある場合には、その都度話し合いの機会を持っている。会議には、全ての職員参加を原則とともに、職員が参加しやすいように、早めに日程や時間帯を調整して、周知をしている。さらに、参加できなかった職員は、ミーティング記録を確認してもらい、内容を共有している。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	○	リーダーを中心として全員が司会や書記を担当し意見の出しやすい会議にしている。			◎	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫するとともに、参加できない職員にも内容を正確に共有している。	◎	前もってなるべく全員が参加できる月日を早めに決めている。参加できない職員は記録を読みサインをする様にしている。			◎	
8	確実な申し送り、情報伝達		日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	◎	就業前には業務連絡ノート・介護日誌の確認を行い、また日勤者からの申し送りもしている。	○		◎	日々、朝の申し送り等が口頭で行われている。また、申し送りノートには、業務連絡を含めて、利用者の情報や医療情報がまとめて記載され、職員への伝達に使用されている。また、出勤時等に、内容を確認した職員は、その都度サインする仕組みが整備され、情報共有が図られている。
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切に支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	○	なるべく叶えるようにしている。				飲み物や着る洋服の選択など、職員は利用者から自ら選べるよう工夫した声かけを行いながら、自己決定ができるよう支援している。レクリエーションなどの際にも、一人ひとりがしたいことをできるように、手の届く場所に道具を置いている。訪問調査日にも、新聞やちらしを見たり、ジグソーパズルや積み木をしたりするなど、利用者が思い思いの時間を過ごしている様子を確認することができた。コロナ禍において、地域の秋祭りも中止となったものの、手作りの神輿を玄関に飾り、祭り気分を味わえるよう工夫したり、菜園での活動や戸外の散歩の機会づくりをしたりするなど、外気に触れながら、季節を感じるができるよう取り組んでいる。コロナ禍以前は、いちご狩りやブドウ狩りに出かけ、目を輝かせた利用者の笑顔の写真を見ることができた。また、大学の実習生が来た際には、利用者や孫のような年齢の学生に喜び、普段はしないような話を披露するなど、活き活きとした様子も見られる。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつつていく。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	飲み物は何が飲みたいかに中どのゲームで遊びたいかなど希望を聞いている。			◎	
		c	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切に支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	食事や入浴名前は希望に添えない時もあるができるだけ本人のペースを大事にしている。			◎	
		d	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉かけや雰囲気づくりをしている。	○	季節の花を挿えたり壁画など季節を感じる雰囲気づくりをしている。			◎	
		e	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるように支援している。	○	声掛けを多くし、本人の表情、状態を観ながら支援している。			◎	
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切に言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。(人前であかさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮、目立たずさりげない言葉かけや対応等)	○	時々適切ではない言葉かけがあるがその都度職員同士で注意するよう心がけている。ミーティング時にも気を付けるように話す。	○	○	○	職員は、人権や尊厳などを内部研修で学ぶほか、頻回にミーティングのテーマに取り上げて話し合い、ホーム長は指導や注意喚起をしている。「ちょっと待って、あとで」などの言葉を発する場面が見られるものの、その後に、職員は利用者により理由や具体的な時間を伝えるよう心がけて、対応をしている。また、居室の出入り際には、必ずノックや声をかけてから入室するほか、不在の際にも、事前に職員は利用者へ声をかけて、了承の上で入室するとともに、一緒に入室するなどの対応をすることもある。
		b	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	○	トイレでは必ずカーテンをや戸を閉めるようにしたり入浴時にはタオルをかけるようにしている。				
		c	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	○	ノックをして声掛けてから入室するようにしている。入居者がホールにいる時には、声掛けを指定から入室している。			◎	
		d	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	個人情報は職員室で保管され漏洩防止についてもミーティングで話し、理解している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	個々の状態をみてお手伝いをお願いし、終わった時には感謝の声かけを行っている。				職員は、草引きや洗濯物たたみなどを利用者に手伝ってもらった場合には、「ありがとうございました」などの感謝の言葉を伝えている。また、利用者同士が励まし合ったり、仕分けた洗濯物を運ぶのを手伝ったりすることもある。中には、間違って他の利用者の居室に入室したり、窓の開閉などの些細な行き違いで言い合いになったりするものの、利用者同士が不快な気持ちにならないように、早期に職員が間に入って対応をしている。さらに、席替えの際にも、当事者のみに留まらず、全ての利用者が納得できるよう工夫するなどの対応が行われている。加えて、仲の良い利用者同士で過ごせるような時間も、職員は大切に支援に努めている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	◎	入居者同士で気が合わない方もいるため座席の位置を考え会話や笑顔で励まし支え合えるよう支援している。				
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらう場面をつくる等)。	◎	トラブルが起こらないよう座席を考え、職員が間に入り入居者同士不快にならないよう関わりあえる対応をしている。				
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	◎	トラブルが起こった時にはお互いの話を聴いて不安を取り除き、トラブルが起きない環境を作る。				
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	入居前の調査や家族や知人の面会時に聞いたりしているがコロナが広まってからは詳しく把握できていないことがある。				
		b	知人や友人等が気軽に訪れたり、本人が知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていったりなど、これまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	△	中々一緒に出かけられないが電話やリモートなどで関係はつながっている。				
13	日常的な外出支援	a	利用者(および意思表示が困難な場合はご家族)の希望に沿って、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない) (※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	×	現在コロナ感染の為外出事は控えている。しかし庭に出て鼻や野菜を観たり近くの土手へ1対1で散歩に行ったりしている。	△	×	○	コロナ禍において、外出制限が設けられ、以前のような外出支援はできなくなったものの、職員は可能な範囲で、利用者が外出できるよう努めている。天気の良い日には、敷地内で日光浴や菜園の世話をしたり、近隣を散歩したり、土手の桜や彼岸花、周辺の田園風景を見に行きなど、職員は利用者に季節を感じてもらえるような支援にも取り組んでいる。また、車いすを使用している利用者も一緒に出かけて、気分転換が図れるよう支援している。さらに、コロナ禍の感染状況を見計らいながら、感染対策を講じた上で、今後、ユニットごとにドライブに出かけて、コスモスなどの見学に行くことを予定している。
		b	家族、地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	○	家族の外出支援の協力はできていない。外出事は職員で対応している。				
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	○	身体的、精神的に変化がある場合は話し合いを行って、なるべく取り除けるよう支援に努めている。				利用者自身に、できることやできそうなことをしてもらえるように、職員は声かけや見守りしながら、待つ支援を心がけている。また、洗濯物たたみや仕分け、片づけなどの手伝いをしてもらった場合には感謝の言葉を伝えたり、ノートに書いてもらった文字を褒めたりするなど、職員は、利用者が意欲的にやりがいを持ちながら継続できるような声かけなどの工夫を行い、心身機能が維持できるように取り組んでいる。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	◎	なるべくトイレにて排泄できるように声掛けや誘導したりむせのある方の食事を刻みやミキサー食にしたりとろみをつけている。健口体操や嚥下体操など取り組んでいる。				
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	◎	出来る事は声掛けや見守りを行っている。しかし入居者がしてほしいと訴えられるときもあるのでやる気の出るような声掛けを行っている。	◎		◎	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	○	少しでも楽しいと感じるような介助をしたり本人の希望も伺いながら支援している。				塗り絵やお盆拭き、洗濯物たたみ、菜園の草引きなど、利用者一人ひとりが、それぞれの得意なことやできることを継続しながら、職員は役割を担ってもらうとともに、楽しみとなるような支援に努めている。また、事業所ではセラピー犬の「まる」が一緒に生活を送っており、ユニットを巡回して利用者とは触れ合い、膝の上で可愛がるなど、癒しの提供とともに、利用者の共通の話題となっている。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごすように、日常的に、ホームの内外で一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	△	本人がやりたいことや出来る事はしてもらっているが一人一人の楽しみを見つけあげることが難しい	○	○	○	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つとらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	○	本人が来たい服を着てもらっている。				職員は、利用者の自尊心や自立心を尊重して、髭剃りや更衣などのできることをしてもらうことはできているものの、ちぐはぐな装いや乱れなどが見られる場合には、さりげなく声をかけて、服を着替えてもらうなどの対応をしている。訪問調査日には、整容の乱れや違和感のある装いの利用者の姿は見られなかった。また、重度の利用者は、着脱しやすいような洋服となりがちとなっているものの、職員が色合いなどの本人の好みを考慮した服装を選んでいる。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みで整えられるように支援している。	○	本人の希望を聞き、散髪時には髪型を聞いたり洋服も着たいものを着てもらっている。				
		c	自己決定がにくい利用者には、職員が一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	本人の好みなどに希望に添えるように支援している				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせたその人らしい服装を楽しむよう支援している。	○	季節に合ったものを着るように本人と一緒に考え選び、希望を取り入れている。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にできなくてさげすみかばーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	衣服に汚れがある時は居室に行き替えたり乱れがある時はそと整えてあげる。	○	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	×	コロナ禍で外出は出来ないで職員が希望を聞きできる限りの対応をしている。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	なるべく色の組み合わせなど考えているがどうしても着替えをしやすい服を選びがちになってしまう。			○	
		h	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	◎	一人一人の状態に合わせた食事形態や嚥下訓練(健口体操)を実施している。				
17	食事を楽しむことのできる支援	b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	△	献立づくりや食材は業者が持ってきてくれるので食材でチェックなど一緒にしている。			△	外部業者の管理栄養士が、栄養バランスの取れた献立を作成するとともに、業者から食材も配達され、各ユニットのキッチンでレシピに沿って職員が調理をしている。コロナ禍以前は、利用者に調理の下ごしらえや配膳などを手伝ってもらうことができていたものの、現在は、感染対策で、職員が手袋を付けて調理を行い、利用者はお盆を拭いてもらうなどの対応に留まっている。月1回、季節の行事食を計画され、その際には食材の配達を止めて、利用者の希望を取り入れた献立を立て、職員が食材の買い出しに出かけて調理した食事を提供している。利用者の誕生日には、職員がケーキを手作りして提供するとともに、行事食の際には、たこ焼きづくりなどを利用者と一緒に作り、大変喜ばれている。茶碗や湯飲み、箸等は、自宅から使い慣れた物を持参してもらったり、利用者専用の物を使用している。破損した場合は、家族に用意してもらったり、利用者と一緒に買い物に出かけたり、職員が代行して、買い物に行き、使用しやすい物を使用している。以前は、職員も利用者と同じ食卓を囲むことができていたものの、現在は交代で食事を摂りながら、利用者一人ひとりの状況に合わせた見守りやサポートをしている。訪問調査日には、和やかに食事をする利用者の様子を見ることができた。また、重度な状態の利用者にも、オープンキッチンでの調理の音や匂いが感じられ、食事前の体操や口腔体操をするなど、食事を楽しみに待つ雰囲気づくりをしている。さらに、職員も同じメニューを食べているため、調理方法などを職員間でお互いにアドバイスし合うこともできている。
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	高齢で調理や片づけは難しいがお盆つきなど出来る事はして頂き達成感が味わえるような言葉掛けに心掛けている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	入居者様に伺ったり家族様に聞いて確認している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって音づかいのよいもの等を取り入れている。	○	なるべく月1回は行事食を作り季節を感じてもらえるようにしている。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせた調理方法としつつ、おいしい盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	◎	個人の状態に合わせた食事形態を考え、盛り付けも工夫したり考えている。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等は使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	◎	本人が使用していたものを入居時に持ってきてもらっている。			◎	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	◎	コロナ禍なので職員は別に食べているが、声掛けや話をしながら介助したりサポートしている。			◎	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	◎	ホールにキッチンがあるので匂いや作っている調理内容を伝えたりしながら雰囲気づくりに気を配っている。	◎		◎	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	◎	カロリー計算された食材を使用し、毎食の摂取量・水分量を記入して体調管理に努めている。				
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	食事形態や回数、量などは看護師と相談しながら考えている。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	△	食材の業者の管理栄養士が献立を考えているが前もって献立表を見て変更してもらったりしている。			○	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	◎	ふきん・まな板の消毒は毎日行っており、食器は食器乾燥機を使用して食中毒予防に努めている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	○	毎食後口腔ケアや入れ歯洗浄をおこなっており、自分ではできない方の介助を行っている。	/	/	/	前回の目標達成計画に挙げて、利用者の口腔内の清潔保持に取り組んでいる。以前から、毎食後の口腔ケアを行うことができていたものの、自分で磨ける利用者の口腔内の状態までは確認することができていなかったため、毎月8日を口腔ケアの日と決めて、重点的に全ての利用者の口腔内の健康状態を確認することができるようになっている。また、十分な歯磨きができない利用者には、職員が磨き直しなどのサポートを行い、口腔内の清潔が保てるよう支援している。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	○	毎月8日は口腔チェックを念入りするよう日を決めて行っている。	/	/	○	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	○	定期的に往診を受けている方もいる。研修で正しい口腔ケアの方法を学び実践している。	/	/	/	
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	○	ブラシによる洗浄や洗浄剤を使用している。	/	/	/	
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック、歯科医の受診等)	○	自分でできる方もいるができない人は職員が対応。みが直しするときもある。	/	/	○	
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	出来るだけ布パンツを使用できる方はトイレ誘導をしたり声掛けをしたり失敗がないようにしている。なるべくならそれを維持したい。	/	/	/	職員は、利用者一人ひとりの排泄パターンを把握して、トイレで排泄することを基本的に支援をしている。重度の利用者にも、できる限りスムーズな排泄を促すため、職員が2名体制で、安心安全なトイレ誘導を行っている。また、おむつやパッドなどの排泄用品の使用時には、職員間で利用者の状況や必要性を話し合い、家族に相談の上で使用している。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	排便チェックを行い便秘などの場合等看護師と話し合い原因を探っている。	/	/	/	
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	◎	ライフサイクル・排便チェック表を毎日つけている。	/	/	/	
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々々の状態にあった支援を行っている。	○	出来るだけトイレで排泄できるよう支援している。本人のその時の状態に合わせおむつ・パッドなど必要性があるか話し合い対応している。	◎	/	◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	看護師を中心に朝の申し送りやミーティングで話し合っており取り組んでいる。	/	/	/	
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	排泄の間隔があきすぎないよう声掛けをしてまた排便・排尿チェック表を付けそれに合わせて声掛け誘導している。	/	/	/	
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういう時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	○	入居者様の状態や家族様と相談し気持ちよく使用できるものを選ぶようにしている。	/	/	/	
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けしている。	○	日中や夜間帯等その場面に合わせて使用している。	/	/	/	
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	適度な運動、水分補給に努めているがそれでも自然排便が難しいときは薬に頼りがちになる。	/	/	/	
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるよう支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	○	週に2回から3回は、入ってもらうようにしている。入浴時間や温度などは本人の希望に添えるようにしている。	◎	/	○	入浴は、午後の時間帯を基本として、曜日は決めずに利用者の状況を観察しながら、週2～3回入浴ができるよう支援している。また、利用者の好みや希望に沿って、湯の温度や湯船に浸かる時間などの柔軟な対応を行い、職員は入浴を楽しめるような支援に努めている。さらに、浴槽に入れない利用者には、足浴やシャワー浴の対応を行うとともに、入浴が難しい利用者には、ベッド上で清拭や洗髪等の介助を行い、清潔を保ちながら、気持ち良く生活が送れるよう支援している。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分に入浴できるよう支援している。	○	リラックスした気分になるように話しかけたり対応している。	/	/	/	
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	○	衣服の着脱や洗身等出来る事はして頂いている。	/	/	/	
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	○	拒否されたときは職員が交代し時間を置いて声掛けしたりタイミングをつかむようにしている。	/	/	/	
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	○	入浴前にはバイタル測定をし、入浴中は全身のチェックを行い入浴後は水分補給をしている。	/	/	/	



項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	○	介護記録に睡眠状態を記入している。不眠のときには申し送りや伝えている。	/	/	/	夜間眠れない利用者には、リビングでテレビを見てもらったり、職員の近くで過ごしてもらったりするなどの工夫を行い、眠くなった頃を見計らって居室へ誘導をしている。また、夜間眠れずに、日中うとうとするような利用者には、無理をせずに、日中にも居室で休んでもらうようにしている。さらに、職員は日中や夜間の利用者の様子を継続的に観察しながら、看護師や主治医に相談するとともに、利用者の体調面を考慮して、眠剤などの服薬が必要な場合には、看護師から家族に説明して、同意を得てから服用をしている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	○	眠れないときには話を傾聴したり、眠くなるまでしばらくホールで過ごしてもらい、起きる時間や食事の時間も本人に合わせるようにしている。	/	/	/	
		c	利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	○	ケアプランに沿って支援を行っている。日々の過ごし方や出来事も変化があれば相談している。	/	/	/	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場が個別に取れるよう取り組んでいる。	○	昼寝をしたりソファで休んでいただいている。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	本人の希望があれば電話をかけているが家族の意向にも合わせている	/	/	/	
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	出来る範囲で介助し希望に添えるようにしている。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるような配慮している。	◎	いつでも電話対応はできるようしている。	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	本人に手渡し、代読したり、壁に貼ったりして目につくようにしている。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力してもらおうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	電話かけていい家族には理解や協力はしてくれているが手紙の支援は出来ていない。	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	理解は出来ているが支払い時は職員が同行し払っている。	/	/	/	
		b	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	×	買い物先へ協力の働きかけは出来ていないが希望を伺って代行で購入している。	/	/	/	
		c	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	○	お金の所持に関しては家族様と相談しながら対応している。	/	/	/	
		d	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	本人と家族の希望に添えるようにしている。	/	/	/	
		e	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	預り金明細表を毎月送り、家族様に確認していただいている。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	創意工夫してできる範囲で支援している。	◎	/	○	コロナ禍以前は、利用者の希望を叶える「夢企画」で、温泉や故郷、喫茶などに出かけたり、家族と一緒に過ごす時間を作ったりすることができていた。コロナ禍において、様々な制限が設けられ、現在は夢企画の実施を自粛している。また、病院の受診時の付き添いや面会など、可能な範囲で、職員は利用者や家族の思いや要望に応えられるよう心がけた対応をしている。
<b>(3) 生活環境づくり</b>									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に入ることができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	日中玄関はあけている。玄関や畑には花を植えたり畑では野菜を作っている。	◎	○	◎	玄関アプローチには、家族が差し入れた季節の花のプランターが並んでいるほか、睡蓮鉢でメダカが飼育されている。また、開放された玄関の前には、木製のベンチも設置され、利用者や来訪者が休憩できるようになっている。敷地内には手入れされた植栽や菜園があり、さつまいもなどの野菜が植えられているほか、菜園横の東屋には、玉ねぎが干され、利用者の散歩の際には休憩所として活用されることもある。また、事業所の敷地内には、地域の周遊バスの「チョイそこ」の停留所として活用されており、地域住民の出入りがあるなど、立ち寄りやすい雰囲気となっている。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を感じており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものが置いていない寂風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えにない等。)	○	共用の空間には行事の写真や壁画に月ごとの飾りつけで季節を感じるよう工夫している。	◎	○	◎	玄関ホールには、職員手作りの神輿が飾られ、祭りの雰囲気を醸し出しながら、来訪者を出迎えてくれる。大きな下駄箱には、ユニットごとに利用者の靴が並び、外出時にはベンチに座って靴が履けるようになっている。下駄箱の上に、利用者の作品である干支の木目込みや、手入れされたメダカの水槽、庭に咲いていた生花が生けられている。また、ユニット内は、広々としたリビングに面して、オープンキッチンが設置され、ダイニングセットやソファが置かれているほか、小上がりの畳コーナーもあり、ゆったりとした空間となっている。さらに、職員が毎月壁飾りを替えて、季節を感じられるような演出が行われるとともに、季節行事の写真なども多数展示されている。加えて、ユニット内の廊下や動線は片付けられ、掃除も行き届き、清潔感がある。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	掃除機・モップ掛け手すり拭きを行い感染予防にも注意を払っている。			◎	
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	季節の花を飾ったり庭の畑で採れた野菜を収穫し、食べたりして喜びを感じていただくよう支援している。			◎	
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	○	居室で過ごす方やホールで過ごしたい方などそれぞれ好きなところで過ごしている。				
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	○	居室に歯テレビ、家で使っていたタンスまた仏壇を置いて心地よく過ごせるようにしている。	○		◎	居室には電動ベッドとエアコン、クローゼットが備え付けられている。利用者はタンスやイス、テレビ、仏壇など、使い慣れた家具や馴染みの物を持ち込むことができるほか、家族の写真飾るなど、一人ひとりに合った個性豊かで、居心地良く過ごせるような居室の工夫が行われている。また、利用者の状況に応じて、床に布団を敷くなどの対応をすとも、転倒防止などの安全対策に配慮した取組みも行われている。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、混乱や失敗を防ぎ、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	○	居室入り口には表札を付けてお風呂場トイレなどもわかるように表示している。			○	建物内部は、バリアフリー構造で、動線に手すりが設置され、安心安全に移動ができるような整理整頓が行われている。また、居室の表札は立体的に作られ、離れた位置からも見えやすいよう工夫されているほか、自分の居室が分かりにくい利用者の居室の入り口には顔写真を貼り出し、利用者が認識しやすいようにしている。さらに、トイレや浴室などの表示も、分かりやすくなっている。
		b	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ほうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	○	新聞・パズル・塗り絵等すぐ手の届くところに置いている。				
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の入り口、玄関に鍵をかけることの弊害(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)を理解し、日中は玄関に鍵をかけることも済むように工夫している。(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)	◎	玄関・ユニットの入り口は鍵はかけておらず交流は自由ができる。	◎	◎	◎	職員は、鍵をかけることの弊害を理解しており、日中に玄関やユニットの入り口は開放されている。また、ユニット入り口のドアには、ドアベルが設置され、職員にドアの開閉での利用者等の出入りが分かりやすくなっている。さらに、2階ユニットには、ドアの前に家具調の衝立が設置され、ユニットを出る前のひと工夫が行われ、利用者の安全確保に努めるとともに、職員が対応を行いやすいようになっている。さらに、外出したい利用者には、職員が行動を制止することなく、屋外に出て散歩をするなどの付き添った支援に努めている。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	○	外に出ようとする入居者には必ず一緒に行くようにしている。				
<b>(4) 健康を維持するための支援</b>									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	入居者基本情報に病歴、現病は記入し、薬剤、注意事項も職員一人一人に熟知できるようにしている。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	いつもと様子が違う時、皮膚の異常、尿便など少しでも変化があれば記録に残し管理者、看護師に報告し早期発見に努めている。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	異常時はすぐに看護師管理者へ報告。必要時には主治医に連絡している。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受診状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	受診が必要な時は家族に連絡し、すぐ連絡するように対応している。	◎			
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	○	まずは家族の希望を第一に考えて連絡している。その上で主治医と相談している。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	往診受診の結果は必ず主治医、家族にその都度連絡している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	入院時、看護要約を渡したり注意事項を入院先に情報提供している。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、日頃から病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	個人情報のこともあり施設にはあまり教えてくれることなく家族を通してのことが多い				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	○	きずいたことは普段より看護師に報告している。看護師は必要に応じて主治医に相談している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	○	24時間体制で連絡できるようになっている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	毎日の申し送りそれ以外でも異常時には相談、早期対応している。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解し、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	薬剤情報を職員間で共有。変更の時は連絡ノートなどに記入。介護記録にも状態記入している。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	○	職員間でダブルチェックして間違えないようにしている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	○	薬が変更になったり追加の時は経過を見て看護師や主治医に報告している。				
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	入居時にある程度家族に説明、状態が悪化した時は家族に連絡、今後のことを話し合っている。				事業所には、「看取り介護に関する指針」があり、入居時に、職員は利用者や家族に説明して、家族等の意向を確認している。また、重度化した場合には、主治医や看護師、職員、家族を交えて話し合い、方針を共有している。さらに、看護師のオンコール体制や医療機関との24時間体制の連携が図られ、職員は安心して、利用者や家族に寄り添った支援が行われている。加えて、職員には看取り介護の勉強会を実施している。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけではなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	家族説明会を開き本人・家族の意向を確認、職員間にも申し送りしている。	○		◎	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	○	家族に対して出来る事で気ない事を説明し了承を得ている				
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	○	同上。家族説明会で話し合いをしている。				
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	終末期の場合毎日往診があり看護師も入る為状態を細かく連絡している。				
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	◎	看取りの場合特別に面会を許可し(コロナ禍の為体調には考慮)家族の話を聞くようにしている。				
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	○	コロナ禍の為積極的に研修は行えてないが毎日感染対策はしている。				
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	コロナウイルスに対して迅速に行動し、感染拡大しないようにしている。				
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れ、随時対応している。	◎	行政からの連絡事項はその都度職員間に申し送りしている。				
		d	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	◎	毎日の体温、体調管理手指消毒、環境設備、消毒換気を行っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
<b>II. 家族との支え合い</b>									
37	本人をともに支え合う家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともにし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	△	こすもす便りで本人の様子を文章、写真などで伝えている。本人の表情を観て関わっている。	/	/	/	事業所では、利用者をともに支え合う家族との関係づくりを力を入れ、季節の行事や運営推進会議の際には、全ての家族に案内状を送付して、多くの家族に参加してもらおうとともに、家族同士が交流を図る機会を確保することができていた。コロナ禍において、現在は行事が縮小され、家族と顔を合わせる機会は減少している。毎月発行している「こすもす便り」の送付する際には、担当職員や看護師から、日々の利用者の暮らしの様子や体調面の報告書にスナップ写真を添えて送付をしている。また、2か月に1回開催する運営推進会議の報告書の送付に合わせて、利用者の状況や事業所の活動状況、研修内容、職員の異動等の報告を行い、少しでも、事業所の理解促進が図られるように取り組んでいる。事業所の出来事や職員の異動などを家族に、事業所便り等を活用して報告しているものの、利用者家族等アンケート結果から、十分に理解されていないことが窺えるため、周知方法を職員間で検討することを期待したい。さらに、電話連絡時や来訪時のほか、介護計画の更新時などに、家族から意見や希望の聞き取りをしているものの、特にコロナ禍に入居した利用者家族との関係づくりに難しさを感じており、ホーム長は、「できるだけ対面で話を聞く機会を持ちたい」と考えている。
		b	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等、家族同士の交流)	×	すべての行事ではないが運動会、敬老会、クリスマス会等出来るだけ参加してもらえよう招待状を書いたり電話を入れたりしている。コロナの為なかなか機会がなくなっている。	×	/	○	
		c	家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的内容を把握して、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	こすもす便りで職員からと看護師からも様子を記入し写真を付けて日常の様子を伝えている。来訪時にも話をしている。	◎	/	◎	
		d	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	よく面会や電話がある家族様には本人の様子を話しているが中には関わりたくない方などもあるので全員にはできていない部分がある。	/	/	/	
		e	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	毎月の「こすもす便り」の中で報告している。	×	/	○	
		f	利用者一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	高齢者におけるリスクに関しては書面にて説明をしている。	/	/	/	
		g	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的に行うことで、居心地よく安心して過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	家族様の面会時、心配なことなどあれば時間を設けて話している	/	/	○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。(食費、光熱水費、その他の自己負担額、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	特別大事なことは説明できているがコロナ感染対策でゆくり説明はできていないが理解と納得はして頂いている。	/	/	/	
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	◎	文書にて説明し了承を得ている。	/	/	/	
<b>III. 地域との支え合い</b>									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	○	いつでも見ることができるよう玄関ロビーに理念・重要事項説明書。運営規定などおいている	/	/	○	コロナ禍以前は、地域の夏祭りや地方祭、市の総合防災訓練、町内の合同避難訓練など、様々な行事に利用者と一緒に参加して、交流を深めることができていた。また、事業所で実施する避難訓練には、多数の地域住民の参加協力を得て、合同訓練を実施することができていた。コロナ禍において、行事が中止され、交流の場が途絶えた中で、地域の役員や民生委員が交代したため、事業所の理解促進を得る機会が持てていない状況となっている。ホーム長は、「入居者が楽しく過ごしている場所として、地域に認知され、根付いてほしい」と考えており、利用者の散歩やセラピー犬「まる」の散歩の際には、積極的に近隣住民に挨拶をするなど、地域に事業所を理解してもらえるよう、継続した働きかけに努めている。さらに、事業所の敷地内を、「チョイそこ」の停留所として地域への開放を行い、ホーム長は、地域住民と関わりが持てる機会に繋がることを期待している。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	○	お祭りや消防訓練など一緒にしたり挨拶、回覧板等地域に受け入れていただくよう関係を深めている。	/	×	○	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	○	消防訓練や町内の防災訓練の時は一緒に訓練し見守ってくれている。	/	/	/	
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	△	「チョイそこ」の停留所でもあるが遊びには来てくれない。	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄りもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	○	朝、夕の犬(看板犬)の散歩、清掃活動町内会に入り回覧を回すなどで積極的に挨拶はしている。	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	△	消防訓練時には支援のお願いをしていたがコロナ禍で関わりがなくなっている。	/	/	/	
		g	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得て、安全で豊かな暮らしができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	○	地域の方のための「チョイそこ」の停留所にもなっている。子育て協力店にもなっている。	/	/	/	



項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
40	運営推進会議を活かした取り組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	○	今までは施設できていたがコロナの為、職員で開催し報告書を送るだけである。	×	/	○	コロナ禍以前は、運営推進会議に、利用者や家族、地域住民に出席してもらって来ていたものの、コロナ禍で面会などの制限が設けられ、現在は、職員のみで全体ミーティングの時間を活用して、会議を開催している。また、会議では、利用者の様子やサービスの実態、評価への取り組み状況のほか、職員研修の内容なども含めて報告を行い、家族や町内会長、民生委員、地域包括支援センター、市担当者等に会議録や資料を配布して、報告をしている。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実態、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告するとともに、会議で出された意見や提案等を活かした結果等も報告し、議事録を公表している。	○	報告している	/	◎	◎	
		c	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	○	時間帯はほとんど14時から15時にしている。	/	/	○	
<b>IV.より良い支援を行うための運営体制</b>									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	○	理念はカード型で森歩きできるように職員に渡している。目につく場所に掲示して常に理念に基づいた支援ができるようにしている。	/	/	/	
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	施設内の目につく場所に掲示している。	○	○	/	
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者：基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	○	年2回の面談記録に目を通し職員の誕生日には手書きでカードを送ってくれる。研修にも一緒に参加している	/	/	/	代表者は、2か月に1回会議等で事業所に来訪があり、ユニットを巡回して、利用者や職員と話しをすることもある。職員の誕生日には、代表者が手書きのメッセージカードを送付するなど、職員とのコミュニケーションが図れるよう努めている。コロナ禍以前は、ピアガーデンやボリング大会など、職員への福利厚生を実施することができていたものの、コロナ禍で開催が自粛された代わりに、職員が個人で利用できる飲食店のチケット配布などが行われている。また、職員のスキルアップへの支援や、メンタルヘルス対策に努めているほか、有給休暇や希望休の取得など、働きやすい職場環境づくりに取り組んでいることもあり、満足度は高く、長年勤務している職員も多い。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	◎	スキルアップできるよう支援してくれている。	/	/	/	
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	毎月の運営会議や事業所ごとの会議にも参加して職員の状況を把握するように努めている。	/	/	/	
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	地域密着型サービス協会やグループホーム交流会などの研修にも参加し意識向上に努めている。	/	/	/	
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	誕生日に手書きメッセージカードを送っている。	○	○	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解したうえで、これらが見逃ごされることがないように注意を払い、発見した場合の対応方法や手順についても理解している。	◎	研修会を開催したり参加したりできなかった職員にはミーティングで報告会を行って理解するようにしている。	/	/	◎	定期的に、身体拘束廃止委員会を開催され、職員間で話し合うとともに、職員は施設外の研修に参加したり、全体ミーティングの中で伝達研修を実施したりするなど、虐待や不適切なケアの防止の理解をしている。また、ミーティングや朝の申し送りの際にも、ホーム長は不適切なケアなどの話題提供を行い、職員に注意喚起や意識づけをしている。さらに、不適切なケアや気になる言動が見られた場合は、その場で職員同士で注意し合うとともに、ホーム長等へ報告して、ミーティングを活用して職員間で話し合い、注意喚起や再発防止に努めている。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	◎	ミーティングや朝の申し送り時に話し合っている。	/	/	/	
		c	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	個人懇談を行って近況の聞き取りをしてストレスを溜めないよう気を付けている。	/	/	/	
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	○	身体拘束についてはこまめに注意したり話し合っている。	/	/	/	
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	ミーティングで一人一人意見を出し合うことで反省点やきずきが見えるので本心で話ができるようにしている。	/	/	/	
		c	家族等から拘束や施設の要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を促している。	○	家族からの要望は現在なし。入居時に身体拘束を行わない支援をしていることを説明している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを含め理解したうえで、利用者や家族の現状を踏まえ、パンフレット等の情報提供や相談に乗る等の支援を行っている。	○	全て理解はできていないが概ね理解できている。				
		b	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	司法書士が関係している方もいる。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	◎	マニュアルを作成し緊急時など研修もしている。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	職員全員が実践力がついているわけではない。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	◎	事故報告やヒヤリハット報告書を記入しミーティングで発表し再発防止に努めている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	◎	毎朝のミーティングで一人一人の状態の報告を行い看護師を中心に取り組んでいる。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	○	マニュアルがある。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	○	苦情相談受付用紙に記入できるようにしている。場合によっては市町にも報告をしている。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	○	なるべく早い対応に心掛けている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者や家族が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	苦情相談用紙を玄関に置いてあるがコロナ感染から玄関先で伺ったり、入居者の要望や苦情は会話の中で聴いている。	○		○	事業所玄関には、意見箱を設置しているものの、コロナ禍で来訪者が減少して、ほとんど活用されていない状況となっている。日常会話の中で、職員は利用者から意見を聞き取りをしている。家族からは、電話連絡時や来訪時を活用して、意見や要望を聞くよう努めている。また、ホーム長は、日々ユニットを巡回して、職員から話を聞くとともに、年2回職員との個別面接を行うほか、日々の申し送りやミーティング時にも、意見や提案を聞く機会があり、職員とともに利用者本位の支援を検討している。
		b	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	○	入居時に契約書の中の苦情相談窓口について説明をしている。				
		c	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	○	現場で意見を聞くようにしている。				
		d	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	面接時に意見を聞いたり、ミーティングでも意見を出し合っている。			◎	
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	年1回以上は出来ていない。				事業所では、評価結果と目標達成計画を、運営推進会議の中で報告するとともに、職員間で目標達成などに向けて、取り組んだ項目の話し合いをしている。また、運営推進会議での報告は、評価結果や目標達成計画までに留まり、目標達成の取組みの経過や結果の報告までには至っていない。今後は、運営推進会議の案内や会議録で、取組み状況を家族等に報告したり、コロナ禍の収束後には、会議の参加メンバーや家族に、モニターの協力を呼びかけて、意見をもらったりするなど、職員間で検討することを期待したい。
		b	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて、事業所の現状や課題を明らかにするとともに、実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	○	目標達成計画を職員間で話し合い達成するよう心掛けている。				
		c	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	○	運営推進会議で報告はしているが、モニターはしてもらっていない。	×	○	△	
		d	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	成果の確認としてミーティングで話し合ったり運営推進会議で報告している。				



項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	○	マニュアルは作成している。	/	/	/	年2回、様々な災害を想定して、近隣にある系列施設と協力を図りながら、避難訓練を実施している。コロナ禍以前は、地域住民の参加協力を得て、合同の避難訓練を実施したり、市や地域の防災訓練に参加協力をしたりするなど、協力体制を図ることもできていた。コロナ禍において、地域住民が参加した合同訓練の実施まではできていない。また、災害対応の取組みについて、運営推進会議や事業所便りを活用して、訓練の実施状況などを報告することができているものの、利用者家族等アンケート結果から、家族に災害への備えが十分に理解されていないことが窺えるため、コロナ禍の収束後には、家族に避難訓練への参加を呼びかけたり、事業所内に訓練の様子の写真を掲載したりするなど、周知方法を職員間で検討することを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	訓練はしている。	/	/	/	
		c	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	◎	非常用食料等点検をしている。	/	/	/	
		d	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	○	地域の消防訓練と一緒にやっているがコロナの関係で中止している。	×	◎	○	
		e	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	○	地域の防災訓練は参加している。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	△	研修はなるべく参加するようにしているが、地域に向けての情報発信は出来ていない。	/	/	/	コロナ禍の影響もあり、事業所として、地域への積極的な広報啓発までには至っておらず、地域住民からの相談が寄せられることは少ないものの、家族や居宅介護支援事業所などから相談が寄せられた場合には、快く対応をしている。コロナ禍以前等には、小学校や幼稚園などに出向いて、指人形劇を活用して、認知症の啓発活動を行うこともできていた。コロナ禍の終息後には、関係機関と連携を密に図りながら、地域活動が再開できることを期待したい。また、地区のグループホーム連絡会等に参画するとともに、研修や会議に参加する機会は減っているものの、市行政や地域包括支援センター、他の事業所等との連携を図ることはできている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	相談があれば支援したい。	/	△	△	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	○	お祭りなどで休憩の場として使用したり「チョイそこ」の停留所にも使用してもらっている。しかしお祭りはコロナでここ2年は開催していない。	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	○	実習は受け入れている。	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	○	地域の小学校の子育て支援事業やグループホーム交流会内参加して連携を図っている。	/	/	○	